

## 第四章 国上校区

### 第一節 国上校区の概要

国上校区は、本市北部に位置し、校区全域に農地が広がる。種子島の中でも天然の良港といわれる浦田を有しており、従五位上笹明神の神階位が授けられた笹のお宮の由縁や種子島の国造りの始まり、稲作発祥の地ともいわれ、文化発祥の伝統と歴史を有する地である。自然豊かな地域でもあり、湊川のマンガロープ(国天然記念物)や太田のへご自生群落(西之表市指定文化財)など北部観光の見所となるスポットが多数ある。桜園・白石・野木平・中目・奥・久保田・浦田・湊・寺之門の九集落から構成され、令和五年(二〇二三)十一月末現在の校区人口は九三七人である。

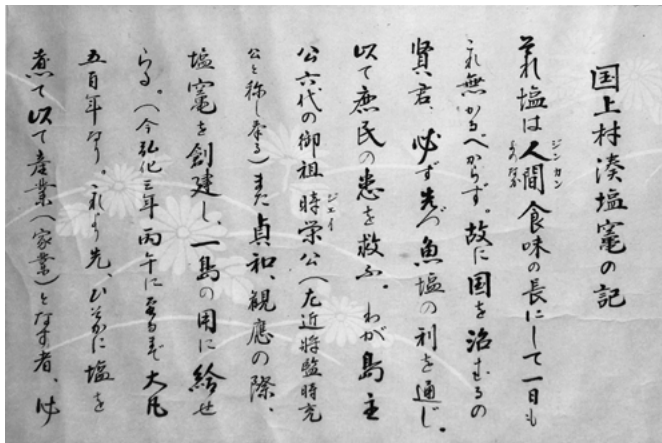


図8-9 国上校区の位置

### 第二節 国上校区の成り立ち

大宝二年(七〇二)にタネ国府が創置され、従三位の階位を授かった国玉明神奥神社が創建された。その後本公治所(国庁)が現国上小学校敷地に創建される。『南島偉功伝』(西村天囚著)に「国上村に大内屋敷と言ふ古跡あり、王朝の頃は朝廷の官人の入りし所を以てかくは称す」とあり、種子島の政務をとった屋敷ではないかと言われ、国上に国府庁があったという説の根拠になっている。

一三〇〇年代に種子島家が入島するが、六代島主時充が種子島を治めるには、主な村に仮屋(殿様が各村に訪れた時の宿泊所)を置く必要があった。国上の仮屋現国上小学校の場所に建てられたので、国上の人は「上の城」と呼んでいた。時充が各村に仮屋を置いた時期は、種子



湊塩竈の記

島治政時とあるだけで明らかでない。ちなみに湊神社に『国上村湊塩竈の記』が残されており、「それ塩は人間食味の長にして一日もこれ無かるべからず」とあり、第一に西之村、第二に国上村湊に塩竈建つと記してある。寛正五年（一四六五）には三島法華改宗が始まるが、律宗門徒の信仰者や修験者との争いが起こり、法華改宗は強行に行われたとする江戸時代の記事もある。浦田神社にも争いがあり、神社は朽ち果て二百有余年烏有の如しと記してある。さらに、国上村には本法寺が建てられ、仏は榮え神道は衰微する時代になる。お家年中行事属類雑記によると、一七〇〇年前後、栖林久基の法華信仰への想いは厚く、法華寺の観音様を勧請して神仏習合の奥神社とする一方で、種子島家のシカ狩りの本座に奉る、寺之門、中目両神社は遥拝所となっていた。太田長野家所蔵の一七三〇年頃の古文書によると、国上村庄屋（芝喜右衛門）、行司（中村七郎衛・黒木惣左衛門・榎本新兵衛・河内五平次）、作見舞（落合権右衛門・芝善吉・落合岩吉）の役人名が記載されている。

また、当時中目之町（四一戸）、天羅之門（寺之門）町（四一戸）、浦田崎（一九戸）、奥之町（一三戸）、高星（四戸）、湊（約二五戸）の約一四三戸あったことが記されている。

明治になると、日本は神道の国であるとして廃仏毀釈が始まり、国上村の本法寺は廃寺となる。種子島の約四〇〇年の法華一色の時代は終わり、宗教自由の時代へと変わる。

また、明治から昭和にかけて国上校区は多くの移住者を受け

入れ、国上校区の半数を移住集落で占めることになったが、在住集落と移住集落との共存共栄・混合融和によって今日の国上校区が築かれてきた。生活は便利な時代となったが、国上をとりまく状況は、漁業は磯焼けと温暖化で不良。農業は病中害や資材の高騰や後継者不足。店は大型店の出店で大字の店は閉店を余儀なくされている。小学生は少なくなり、里親留学や親子留学で子どもを確保するなど、過疎化の中で行政と連携し、地域おこしに取り組んでいる。

### 第三節 地名・字名

#### 一 大字国上の小字一覧

浦田町、桜ヶ岡、桜ヶ谷、大原岬、大原、大中峰、長笹、中野平、浦田、小嶋、御岬、中川、唐人路、大降、馬渡、鬼ヶ頭、中路、堤、上ノ田、生田、上ノ宮内、下ノ宮内、鞍掛、橋掛山、中之門、木根ヶ山、長山、久保田、上崎、高屋、加治山、奥西平、根志町、牛川、奥、葉山、塩屋ヶ峰、萩之峰、下萩之峰、田梅口、東塩屋、峰、湊方崎、湊、奥大田尾、四郎次郎田、内ノ湊、路芝田、大中田、高浪、深町、大田、椎木田、河角、崎山、大山崎、竹折山、大牟礼、赤木嵐、犬山、保木、千人塚、門之元、管丸、小中田、松道、赤石、平庭、稲庭、修理膳田、高峰、花堂、船之上、稲村、前之田、カツラ石、浜之門、野崎、木切町、西浦赤丸、笹之宇、都、大長角、遠園、谷ヶ添、横峰、藪牟田野、小園、園田、松崎山、大長野、一本松、三本松、岬田、萩之平、赤尾堂、町野、浜田、坂元、番屋ヶ峰、出之口、国見、スタ長、赤道、平山之波瀬、大平、栗山、僧之尻、鳥松、横瀬、嵐野、仁田ノ田代、堀ノスソ、塩摺田尾、絹懸山、逆水小田、山之神田、大渡瀬、古河、開、中之田代、古仁ヶ田代、西平、中之西平、牛水ヶ池、大平見、船石、長山、堀切、靄之御前、高津間、河氏、桑木田代、下大渡瀬、今立、下河氏、槻之木、赤紋田、大峰、門口、大田代、岩之塔、松之下、楠原、鮮水、木引道、山之木

渡瀬、伏木田、追落、高毛田、軽ヶ小田、白石、小田尾、大内ノ立、中之谷、大谷、下之谷、中田之平、御小屋、古樋、青折屋、大比良、駄竹之迫、鹿之木、大堂、大多尾、焼入、今成、猿之頭、崩石ヶ田尾、鍋ヶ迫、下鍋ヶ迫、広浦、船門、大瀬戸、田之崎、馬毛田、船原、園口、河宇都、田代、河口、蛭山、久保麦嵐、麦嵐、杵之木山、山開、杵ヶ山、平五郎、中之峰、内之峰、戸切、東タル木迫、西タル木迫、平原、割峰、小俣、雀ヶ野、荒平、馬瀬頭、峰之下、上之牟礼、丸野、雨堤、上松ヶ山、長迫、黒木小田、下松ヶ山、柳之久保、野木之平、松山、松笠、上伏木田、鹿谷、西鹿谷、中之鹿谷、スクボヶ峰、池之山、東池ノ山、小田代、奈良之木之角、下牟礼、屏風石、石長谷、次郎兵衛、大石之山、中嶋田、門之尻、中石津川、西石津川、大石之谷、東石長谷、上長谷、鈴嵐、高袴、河安山、山之出口、山之尻、高石津川

#### 二 特徴的な地名など

##### 国上の由来

かつて種子島は多禰国と呼ばれ、大宝二年（七〇二）から大和古代国家の一国であった。その後、天長元年（八二四）十月に大隅国に併合された。昔から島の北は「島上」とされていた。多禰国は島であるので、国上の地域は「島上」であり、元禄二年（一六八九）に書かれた『懐中島記』の冒頭にも「北を持つて島上となす」と記されている。国扱いされたので「島上」が「国上」になった。これが国上の地名の由来である。

### 太田の由来

種子島地区文化財保護審議会で発表を行った羽生源志氏の資料によると、太田のオホは素晴らしい田、田の開けたところを意味している。江南の渡来人が紀伊の国の太田に住んでいて土地を広げていったのが太田の始まりのようである。

### 太田の地名(通称)

#### 馬の背道

千人塚の近く。道路の両脇が谷になっていて、馬の背を歩くような狭い道があった。

#### サンキー坂

長野勝宅と故昭一宅との間の道。

#### ゼンキョウ坂

寛良平氏宅の倉庫から背後の山を登る道。寛家の墓(山寺)柳原に行く道。昔、横瀬から山道を下ってきて、付き人は太田にとどまり偉い人がゼンキョウの坂を上り山寺へ行った。

#### 山 寺

赤字嵐の長野茂氏の畑は山寺の跡。土器片が出る。

#### ナバヤマ

シイタケ栽培をしていた寛家の辺り。

#### モトヤシキ(元屋敷)

寛家の移住当時住宅のあったところ。ヘゴ林入口。

### 中目の「ニタ」の由来

昔、シカが飛びまわり、寝転んだりして、体のダニなどの虫を落としたりする湿地や沼地を「ニタ」と呼んでいた。現在中目の岩本一与氏宅の近くで、通称「迫の下」のあたりに池があり、その池から下の青野家の付近までは湿地や湿田になっていて、中目の人たちは昔から「ニタ」と呼んでいた。昭和十二年(二八七九)に青野家がニタに移り住んだ頃、ニタには笹河家が一軒あるだけで全て湿地帯であった。その後、時代が進むにつれ湿田や沼地は埋め立てられて、人家も建つなど様変わりして「ニタ」と言う面影はなくなっているが、現在でも中目の人たちは青野家の付近を「ニタ」と呼んでいる。ちなみに、中種子の満足山は「ニタリ山」とも呼んで「ニタ」に由来する所と言われている。中目の「ニタ」の由来も同じではないかと考えられる。

### 監獄所跡と懲役墓

桜園には昔、監獄所があり受刑者は山の伐採作業等をしていた。場所は定かではないが、現在の深見金男宅付近らしい。また、亡くなった囚人たちは、旧国上中から柳原へ向かう県道の途中から左へ少し入った場所、字大平見に葬られていたそうである。現在大平見には、懲役墓の跡らしい石が積まれた場所が残っている(阿多實憲氏談)。

## 第四節 歴史的特殊性

### タネ国府の存在

続日本紀に「大宝二年（七〇二）八月丙申、薩摩、多禰、化を隔て命に逆らい、戸を校し吏を置く」とあることから大和朝廷の支配下に入りタネ国が創建されたことがわかる。和銅二年（七〇九）の「タネ国の国司及び国師僧減例にあらず」の記事で、国司と國府寺僧が確実に配置されたことと、同七年四月二十五日元明天皇からタネ国の公印が授けられた記事があり、タネ国は確実に存在した。その所在地については諸説あるとされている。

### タネ国府国上説

『国上郷土誌』の「種子島における国上の位置」の項に下野敏見氏の大内屋敷文を引用した国上国府説について、以下のことが記されている。

- 一、南島偉功伝（西村天囚著）に国上村お仮屋のあった付近に、大内屋敷ありと明記されている。
- 二、羽生道潔著の年中行事記に国分寺も国衙も国上説を取りたいと記載されている。
- 三、下野敏見氏の「タネ国府は何処に眠る」の資料に、国上には「大内屋敷」「大内土」の王朝風の言葉が残っ

ている。特に奥神社など国上の神社は古代の佇まいを漂わせている。地名には、花堂、稲村、稲庭、寺之門がある。

- 四、種子島年中行事記に「国上村に代官屋敷あれば、都への船の往来遠見の出る浦田の良港や大隅、日向を一望できる国見山もある。古寺の伝承・国分寺の想定や、「北を以って島上となす」と懐中島記の冒頭にも記され、国扱いされたので「島上」が「国上」になったとされる地名の由来もある。以上のように国上国府説が想定されている。

日本神階位に申請がなされ大隅国神階位帳に、「従三位、一八前、国玉大明神」と記載されているものを国上の奥神社に比定する説があるが、笹河宮司の奥神社由緒によると、葉山付近を聖地と定め、国玉明神を祀り、国府装置の儀式が斎行され、そのとき、国玉明神奥神社が創建されたという。このことは、タネ国の存在とタネ国国上説の根拠をさらに高めることになると思われる。

『種子島家譜』に国上の大内侍の存在を示す記録がある。

- 一、種子島家譜に六代島主時充は、後継ぎがいなかったため姻戚に当たる又太郎に家督を譲る約束をしたが、実子が出来たので、松浦党の遠藤頼堅に又太郎を殺させ、そして国上村の大内侍（奈良時代京都から移り住んだ貴族の子孫）の娘を遠藤頼堅に嫁がせ、又太郎の

近習岩坪高山五郎知重に大内侍の次女を嫁がせ、義兄弟とし、さらに遠藤に野間村を、高山五郎知重に平山村を与え家老とするとある（大内侍の姉妹のことが記載されている）。

二、年中行事記に京都將軍御代の記に「年首、野老を進上する八つ瀬の里は内裏百姓村なり、されば国上村に大内屋敷という家あり」と記されている。しからば種子島家に於いても、「前よりの旧風を移し伝え、今に至り国上村に限り元朝めでたく野老を進上奉りきたる事ならんか」とされ、また、現和の庄司浦は細島黒木家から時氏を迎えた目出たい浦津、故に年首にナガラメ初肴を進上という記事がある。国上村の野老は大内侍の子孫が献上するとあり国上の野老の進上は江戸時代まで続いている。国上の大内侍の存在を示す記録である。

#### 大内屋敷国府説について（国上小学校敷地）

タネ国府は、奥の葉山を聖地と定め、大宝二年（七〇二）に国玉大明神を祀り国府創置の儀式が斎行されたのが始まりで、葉山に国玉大明神奥神社が創建された。また官人が住む仮公治所も建てられた（『神階位』、笹河官司の私信）。その後、国上の敷地に国庁が移転。「大内屋敷」については、『南島偉功伝』に「国上村に大内屋敷と称する古跡あり、王朝の頃は朝廷の官

人の居りし所を以つてかくは称すや」とあり、大内とは「内裏」の事である。この事から「大内屋敷」とは天皇または天皇から遣わされた役人が種子島の政務をとった屋敷ではないかと言われ、現国上小学校敷地に国府も国衙もあったという説の根拠となっている。また、江戸時代には仮屋が置かれ、国上小敷地あたりを「上の城」といった。

大宝二年から天長元年（八二四）まで国上小学校敷地に国府庁があった。仮屋が置かれたのは、タネ国が大隅の国に併合されて、約五〇〇年後の一三〇〇年代の頃で、種子島時充が入島してからのことである。

#### ふもと（府元）

現在の国上小学校敷地に国庁、国衙があったといわれ、国庁、国衙を取り巻く場所を、国府と呼んだ。国府の近くに接した中目地域を「フモト」と呼んだと伝わっている。

#### タネ国分寺説

国分寺創建は、聖武天皇の天平十三年（七四



仮屋が置かれた国上小学校

(一)に国分寺(金光明四天王護国寺) 国分尼寺(法華滅罪の寺)の詔を發布して造寺が進められた。島分寺についてはわかっておらず、次の説がある。

- 一、寺之門説(佐藤敬順氏)
- 二、榕城説(河内和夫氏)
- 三、中田説(小川亥三郎氏)
- 四、島間説

故佐藤敬順氏が寺之門説をとる理由

- 一、国庁時代の官人の住所が国上であったということ
- 二、寺の門と言う地名
- 三、昔、寺があったという伝説
- 四、古代瓦の破片の存在

以上四点のことが考えられる。その他、寺之門の河内宅の礎石のすばらしさに、島分寺ではないかと言ったこと。それに大内屋敷が国上小学校敷地にあったことは、大変有力である。さらに、弥生土器が出土している。弥生土器は奈良時代まで使用されていたことから寺之門説が上げられる。しかし、寺之門に国分寺があったという確かな伝承はない。

#### 『西之表市の伝説』『西之表市年表』に見る国分寺説

- 一、和銅二年(七〇九)から一五〇年間島分寺が存在したとされている説

『続日本紀』に「七〇九年勅して云々」とあるのは、国師

は行政長官、国師僧は國府寺で国分寺僧でなく、タネ國府の存在を示すものだとする説がある。

- 二、天平十六年(七四四)から八三年間島分寺が存在したとされている説

「類聚三代格に勅す…略…多禰と対馬は云々」と『西之表市の伝説』にあるが、天平十三年に聖武天皇が国分寺詔を発するが、国分寺建立は何も進まず、七四四年に国分寺建立の督促の勅を出している。「類聚三代格に勅す」とあるのは督促の勅のことではないかと考えられる。

- 三、『西之表市年表』では、「八〇六年に島分寺が創建された」と記載されている。

しかし島分寺は、いつどこに創建されたかわかっていない。参考までに、日本における国分寺の詔については、西暦六九〇年説など三つの説があったようだ。聖武天皇の天平十三年(七四一)説が現在広く受け入れられている。

また、『日本書紀』に六八五年の条に「諸国の家ごとに仏舎を作れ」とあることから、これを國府ごとの寺院すなわち國府寺としたもので、国分寺は金光明四天王護國寺、法華滅罪之寺と呼ばれ、七四一年以降になって、国分寺の名称が見られるようになった(『愛知県史』通史編一)。

#### 国見山について

浦田、西之表港線の県道を西之表の方向に走ると、寺之門を



国見山からの眺望

過ぎるあたりの左側にテレビアンテナが立っている山が見え、そこが国見山である。山頂からは、三島や薩摩半島大隅半島宮崎方面へと太平洋が一望できる。奈良時代には国上小学校の場所に国府があり、「この山より日隅、豊後の地を遠見すべし」と三国名勝図会の項に記されている。『御家年中行事』には「国上に代官屋敷あれば、都への船の往来遠見の所なくてはなるまじきことなり」と記され、船の見張りを「狼煙」をあげて、大隅半島にある国見山に伝える重要な拠点であったと伝えられている。また、江戸時代には異国船を警護する「北の番所」があつて、国見山で上げた「狼煙」は、日立の峰―古城ヶ原―矢倉台―嘉永山―赤尾木城へと伝えられていた。

明治時代の地租改正によって「字・地番」が付けられ、国見山の「字」は番屋ヶ峯となつていく。国見山は三角点になつていて、昭和三十年（一九五五）頃までは一定期間国旗が揚げられていた。令和二年（二〇二〇）十一月、国上校区誌編纂委員による国見山の調査を行った。

国見山は、現在は雑木が茂り、南西の方向の展望は十分でないが、三島から薩摩半島大隅半島、

宮崎まで太平洋が一望できる絶好の場所である。「狼煙」を上げたと思われる場所二、三カ所見受けられたが、確証は得られなかった。

山頂には、高さ七〇センチほど、直径七センチに石積された円形の台座があつた。何に使うために作られたのか不明だが、この円形の台座については、これまでの調査では確認されておらず、新しい発見となつた。

#### 国上の寺子屋教育

秀照院坊（ご包イ役兼務）は国上の寺子屋教育に勤めた。陵墓は笹河氏奥津城にある。嘉永五年（一八五二）忌、「本法院宗脱信士」と明記されている。神仏習合時代であつたことから、神道の奥津城に埋葬されたのではないだろうか。陵墓とは皇族関係者を葬る墓のことをいい、奥津城とは神道の墓で、「おくつじょう」と呼ぶ地域もある。

本源寺の国上檀家の河本家に曼茶羅が三幅安置されており、中でも康正元年（一四五五）に日隆筆の曼茶羅が目される。さらに、本法寺は廃仏毀釈で廃寺になるが、そのとき、曼茶羅が焼き捨てられようとしていたため、南種子から浦田に移住していた、平素から仏を深く信じていた檀家である柳田は、許可をもらい密かに我が家に蔵したとしたりと河本家に伝わる由来記に記されている。須弥壇仏壇の中から刀と前田豊山の墨書が出てきており、曼茶羅だけでなく、須弥壇仏壇に安置されたまま、

一緒に運び出されたと考えられる。その後、浦田の柳田家に須弥壇及び仏壇が安置されたことで国上の檀家が集まって仏事が営まれるようになったという。ところが、浦田までは遠くて参拝する人が少なくなり、国上の中心である中目の河本家に仏具等に移し、法華宗檀家の仏事は河本家で営まれるようになったとのことである。康正元年に日隆筆とされる曼荼羅は、本法寺の須弥壇に安置されていたものであり、日典が亡くなる八年前、また淡州の沙門浄光院日良が尼崎からきた寛正五年（一四六五）からすると、一〇年前の筆となる。

#### 前田豊山先生の墨書

前田豊山の墨書は、国上では、法華檀家の河本家と浦田の浦崎家にあり、浦崎家の分家には豊山書の掛け軸がある。前田豊山先生は明治十一年（一八七八）に種ヶ島準中学校を設立、後の農林学校、種子島実業高校となる。学問と教育のために捧げ、種子島聖人と尊敬された。前田豊山は、中秋の名月は浦田で見るのが天下一と激賞し、小島の老松を照らし洋上はるかに染めていく、清涼の美をたたえて、しばしば浦田の地を訪れたという。月見の場所は、瀬崎の浦崎家であったということで、墨書が残されている。また、板戸への墨書もあるが、残念ながら文字が薄れている。

#### 国上の中央に位置する中目、寺之門の郷中制 中目地域の郷中

- 一、稲庭郷中 中目神社の周辺の区域（字花堂がある）。
- 二、稲村郷中 昔は前の田、稲村、東園（一部）は水田であった。中目の中心を通っている県道の両脇は水田で、埋め立てて店や住宅地となっている。
- 三、遠園郷中 昔、ガラン山、本法寺があった。
- 四、浜の門郷中（破魔の門） 小学校敷地に国府説がある。また、藩政時代には島主の仮屋が置かれ上の城と呼んでいた所。昔は国民学校の農場があった。

#### 寺之門地域の郷中

- 一、横峯郷中 通称横目、アコントウ（赤尾堂）、廟と呼んでいた場所（日高紀伊守宗俊の墓地のある周辺）。
  - 二、蘭牟田の郷中 通称イブタン郷中、東イブタン、西イブタン。公民館・尻長野・岬田などがあり、寺之門でも水田が多い区域。
  - 三、小園郷中 寺の川、ガラン山がある。国上澱粉工場跡、太田が含まれる。
  - 四、むかえ郷中 馬籠、通称東京駅、三本松周辺の区域。元国上中学校、太田が含まれていた。
- 昔は郷中単位で村の連絡や、取りまとめ等を行い、冠婚葬祭、神社の共同祭祀等、郷中の人たちが助け合いながら村の運営がなされていた。中でもお祝いごとには郷中の人を案内し、葬儀

においては、郷中の人たちが携わり全ての準備を整え、葬儀を営み供養が行われていたようだ。平成になっても、中目集落では郷中区域内で共同の清掃作業を行い、その後、磯遊びをして親睦を図り、願成就においては、郷中対抗の運動会等を行っていた。現在行政による班単位の取り組みが行われる中で、郷中制が続けられている部分もある。郷中制は国上校区では中目、寺之門集落にだけ見られ、湊、奥、浦田の部落に郷中制はなかったようである。



沖永良部島縁故者移住百周年記念碑（桜園）



野木平移住記念碑



沖永良部島縁故者移住百周年記念碑（白石）



桜園部落創立百周年記念碑

明治十九年（一八八六）から昭和にかけて、国上校区は移住者を受け入れてきた。久保田（坊津）、野木平（甕島）、桜園（桜島、奄美）、白石（奄美）、上古田（奄美）、川安（奄美）が移

第五節 移 住

住し、校区の半数を移住集落で占めることになったが、在住集落と移住集落との共存共栄・混合融和によって今日の国上校区が築かれてきた。

### 久保田移住記念碑、公民館建設の話

『種子島研究』二〇によれば、久保田集落の戸数は明治十九年一九戸、昭和二十七年（一九五二）二四戸、昭和五十一年五四戸となり、今日の久保田集落が形成されてきた。昭和十六年には食うに困らない状況になった喜びを記念し、また、任侠の人に感謝し、昔を忘れてはならないということで、公民館に「移住記念碑」を建てた。



久保田の移住記念碑

碑文は、書き下し文で、移住のいきさつを書いている。農民が「家魚猟を業す」といったり、「当時の漁業が危険で業に安せず（不安である）。そのため移住を計画した」と書かれている点が重要である。石碑の石は四〇〇以上の距離を大人も子どもも含めて、みんなで山から運んだという。昭和六年、牛と仔馬の生産の奨

励を受け、その奨励金で同八年に公民館を建てた。当時は木造であったが、昭和四十一年に鉄筋建ての公民館に改築した。集落一同、浄土真宗で、そのためか、共同作業を始め全てが一つにまとまっている。

### 百引からの移住者と記念碑

桜島の大爆発により桜園へ移住してきた人々の中で肝属郡百引村から移住してきた人々は、桜島から移住してきた人々とは別に、山西宅北側に記念碑を建て氏神として祀っていた。その後、昭和十年頃、現在の高石津川（字名）に移した。

旧燃脇伊勢春宅前の杉山の頂上付近に石碑が残っている。佐々木正内氏（佐々木和己氏の祖父）が神主を務めていた。

### 国上の戦後の開拓団（上古田、今成開拓団）

上古田集落の由来については、大正三年（一九一四）に高田三郎が上古田の土地を買い上げたことに伴い、住民が立ち退きを命じられた。その後戦後の農地改革によって土地が払い下げられ、昭和二十二年に入植の許可が出たことで、少しずつ上古田に移り始めた。そして同二十四年に二七戸で上古田集落として形成された。野木平から一四戸、白石から一二戸、残り一戸は他地域からの人であったという記録がある。

『西之表市年表』には、昭和二十二年に白石地区に二七戸入植、昭和二十四年に上古田今成に二五戸入植の記録がある。

野木平集落と上古田今成とは、野木平公民館の裏山辺りが境界となつているが、野木平公民館近くの今成に野木平の人が住むようになった。野木平集落は六班に分けて運営されていたが、公民館近くの今成に住む人たちは七班とするようになった。

戦後、上古田開拓団・今成開拓団があつたということ聞き、地域の人に聞き取り調査を行ったが、上古田開拓団というのではなく、今成開拓団と川安開拓団があつたことがわかつた。

#### 今成開拓団

昭和二十二年に白石に二七戸、昭和二十四年に上古田今成に二五戸入植との記録があり、その当時の開拓団について地域の四、五人の方々に話を聞くことができた。昭和二十四年入植後に、上古田・白石・野木平の方々が一緒になって、今成開拓団として入植し生活されていたとのことである。開拓団事務所は、最初の頃は白石公民館（会宅）の一室を借りていたが、野木平公民館（会宅）に併設した形の小さな部屋を作つて事務所にしてた。

#### 川安開拓団（第一期） 一里十丁近辺

『西之表市年表』に昭和二十四年に国上川安に九戸入植と記してある。一里十丁から簡易水道貯水タンク付近に沖永良部から九戸入植して川安集落が形成され、同時に川安開拓として昭和五十年頃まで生活していたが、日本の経済成長に伴い都会に

移って行くようになり、自然消滅した。川安には、燃脇・西村・鍋田武・鍋田喜一郎・島田・中田・玉江・池田の九戸が住んでいた。

#### 川安開拓団（第二期）大平見（元国上中学校から柳原線の途中）

『西之表年表』に昭和二十八年、国上川安に三戸入植すと記している。第一期の川安には土地がなく、国有林の大平見に入植した。年表では沖永良部から三戸とあるが、原野氏が最初に入植し、沖永良部からの三戸と合わせ、実際は四戸入植し、第一期の九戸の方々と合同の川安開拓団として個人住宅を事務所にしてた。大平見の川安には、田中才三・川間秀保・大江喜志満・西村成功等が住んでいた。第一期と同じく昭和五十年頃に川安集落は自然となくなつた。

## 第八節 戦争と疎開

戦争体験者数人に聞き取り調査を行ったので、代表として三人の体験談を掲載する。

山崎吉彦氏（昭和五年（一九三〇）生）

農林学校の一年生のときに増田の飛行場に動員されて作業に行った。長いときで三五日くらい増田にいた。木炭トラック二台くらいで二〜三〇人乗って行った。自分は昭和二十年に農林学校に入学して、すぐ増田に行った。増田に着くと、飛行場の広場は既にできていた。自分たちは掩体壕を作るのが仕事だった。そこで食べたご飯は、大正時代の米ではないかと思うほどおいしくなかった。量も少なくてすぐ腹が減った。みそ汁も、干した大根にウジがついていたのか、ウジが浮いていた。腹が減っていたので、嫌だったが無理して食べた。一日何時頃まで仕事をしたかよく覚えていない。風呂もあったが、シラミがわいて大変だった。

作業中に敵機が来たことはなかったが、農林学校の防空壕から「かなと丸」にグラマンが機銃を浴びせる場面を見た。そのとき西町が焼けたのだったか、種子中も焼けたが、農林学校は焼けなかった。

増田の現場には兵隊はほとんどいなかった。朝鮮から来た人もたくさんいて、自分たちと同じくらいの年だったと思う。鍋割の壕の近くに行ったこともある。馬に白米と玄

米を背負わせて持って行った。皆が集まれるくらいの壕だったはずだから相当大きかったと思う。古田の十三番には、米軍が上陸することを想定して戦車を止める堰を作りに行ったことがある。寺之門には皆が入れるような壕はなく、自分たちでそれぞれ作っていた。

戦時中に西浦の海岸に兵隊が流れ着いたことを覚えていいる。最初に西浦に寄って、それからいろいろなところへ寄るようになった。集めて遺体を焼いたとは聞いたが、自分はまだ若く、引揚げなどには関わりなかった。消防団の人たちが引揚げていた。

竹之内和香氏（昭和九年生）

疎開当時は小学五年生。野木平からは子どもと引率の大人二人の二六人が疎開した。引率は鶴見まつえさん（当時二四歳）と原崎みさこさん（当時二二歳）。夜、たちばな丸に乗り込んで、鹿児島から伊佐までは汽車で行った。

疎開先は伊佐郡西太良村こうや集落で、曾木小学校に通った。先生は前田先生という人で、子どもたちをとんでも大事にしてくれた。前田先生は終戦後種子島にも来てくれて、こちらからも先生にナガラメを贈るなど、交流していた。

最初はこうや集落の民家に生徒二人ずつ振り分けられてお世話になったが、その後藁葺小屋を建てて、そこでみんなで生活した。

朝起きて水くみ、川で洗濯した。引率のお姉さんたちが

お弁当を作ってくれたが、おなががすいて学校に着く前に食べてしまったこともあった。柿や芋のコッパが干してあるのを拝借するほど食べるものがなかった。学校が休みの日には農家のお手伝いに行つて、お札にご飯を食べさせてもらうこともあった。ノミヤシラミがわいてガサができて痒かった。終戦の放送は、学校でみんな静かに聞いた。野木平から大人が三人ほど子どもたちを迎えに来てくれて、鹿児島に汽車で帰り、かなと丸というポンポン船に二人ほど乗って帰ってきた。野木平に着いたのは九月二十九日であった。

#### 落合直通氏（昭和十一年生）

国上から波止場のある西之表港まで、馬込坂を越えることと四度目にしてようやく渡鹿できた。渡鹿前の三回は、小さな足で轍わだちの著しいバラスの道を歩み、敵機来襲の危険を避けるため夜間航行に備え、集合場所の栖林神社で乗船を待機したものの、警戒警報発令によって、その都度引き返した。

ようやく金十丸かなとまるに乗船して鹿児島に到着。汽車で川内乗換、当時開通運行していた宮之城線で疎開先の伊佐郡西太良村（現伊佐市大口曾木）にたどり着いたはずだが、そのあたりの記憶は思い出せない。

到着後、曾木国民学校の校庭に集合し、名簿順に分宿先を指定され、それぞれの家庭に引き渡された。その後しば

らくして集落（大字）によって前後したと思うが、合宿のため空き地に藁葺の掘立小屋を建てて集落単位での集団生活が始まった。

日常の生活は、食事をはじめ身の回りの面倒を見てくれた若い女性三人が担ってくれた。

私たちの住んだ場所は池のほとりにあり、池の側の坂を登ると小高い山の中に氏神様を祀る「神社」があった。山中の神社が一番安全な場所だといわれ、その神社の床下が教室代わりで、机は各自用意した「画板」であった。

終戦の事実は、小屋の前庭で全員整列して聞いた。雑音が多く聞き取りにくい「玉音放送」で、にわかに信じがたく、直ちに理解できなかった。

十月初め、裸の水道栓から流れる水や瓦礫の積もる廃墟を横目に見ながら、焼け野原の鹿児島市内を経由して波止場にたどりついたことを思い出す。

#### 喜志鹿崎防備衛所と戦時中の状況

戦時中「九州海軍航空隊種子島基地」が中種子町増田に建設され、喜志鹿崎に防備衛所が設置された。五六〇〇平方メートルに八つの営造物が配置されていたことが、防備衛所引き渡し目録で確認できる。

令和元年（二〇一九）の現地調査では、砲台跡、見張り台の後、防空壕跡などが確認できたが、第一兵舎・第二兵舎・烹水



喜志鹿崎の戦跡

浴場・井戸等のあった場所は、荒廃しており細部にわたって確認できなかった。灯台近くの駐車場の西側の山中に、コンクリート造りの建物があり、入口はL型になり、のぞき窓があった。天井には空気抜もされていた。戦争当時は喜志鹿崎灯台が立っている丘に、見張り台があり高射砲が据えてあった。

喜志鹿崎には、数十人の兵士が駐屯していたが、指揮官は敵機が上空を飛んでも、高射砲で打つことはさせなかった。軍備力が貧弱で高射砲で打つと、逆に攻撃の的にされることが目に見えていたからである。それでも、何回か空襲を受け、兵一三人が死亡したと『国上郷土誌』に記されている。

## 第七節 人物

### 高田三郎

神戸の商人（酒屋）。大正三年（一九一四）、喜志鹿崎一帯の土地を購入。

浦田の小島を過ぎたあたりから岬一帯は二二町歩に及ぶ島主の御牧で、功を立てた寺之門の落合氏に牧場が与えられていた。落合氏は五〇人の人を募って管理していたが、大正三年に高田氏に売却した。高田氏は昭和十年（一九三五）頃、喜志鹿崎に乳牛の牧場も設けていた。

大正元年、鹿兒島高等農林（現鹿兒島大学農学部）種子島牧場設立。昭和八年、新高乳価工場が設立された。その頃喜志鹿崎に乳牛の牧場を作り、上西の松元氏が牧夫で働いていた。

戦時中、増田種子島航空基地の喜志鹿崎防備衛所として五六〇〇平方メートルを貸地とする。昭和二十年頃から始まった農地改革により、浦田・久保田部落に土地を譲渡。土地は各戸に配分された。久保田の土地所有権登記済書は高田三郎氏からの移転となっている。終戦後、久保田に土地の売買等で一時滞在したことがあった。浦田の濱松次右衛門氏の父親と親交があり、足が不自由なため籠で担がれて移動していたという。

桜園澱粉工場は、神戸で酒屋を経営していた高田三郎氏が設立した。水利権問題で桜園集落と揉めたが、集落役員をしてい

た宮川三吉氏や工場長をしていた阿多實美氏（阿多實憲氏の父）の働きで和解した。澱粉工場を設立した目的は定かではないが、高田氏は播州（播磨の国、現在の兵庫県西南部）に牧場（養豚場）を経営していて「澱粉カスを飼料にするためだったのではないか」とのことである。また、国上の岬一帯にも牧場（養豚場）を持っていて、事務所も構えていた。澱粉工場は途中で経営者が反橋氏に代わったが、反橋宗一氏は、弟（安之助）が高田氏の養子となり、その関係で「後を引き継いだのではないか」といわれている。昭和九〇四十九年まで操業していた。

高田三郎は、淡路島出身の人で故郷のいざなぎ神宮には、彼が寄贈した石碑が建っている。また、酒蔵（大正五年設立）は神戸市灘区大石にあり、本高田商店（現金杯酒造）である。大正八年六月には、種子島産業株式会社の取締役にも就任している。以上は阿多實憲氏からの私信である。

桜園瓦工場と精米所は、高田三郎が桜園澱粉工場に瓦を被せするため設立した。各地から瓦職人を連れて来た。白石の市来義隆氏も働いていた。その後、阿多實美氏が昭和二十八年頃まで工場を引き継いで操業していたが、阿多氏が亡くなると瓦工場の職人として働いていた松下氏が同三十三年頃まで操業した。瓦の原料の土は、白石の水深（現在の高石文蔵氏宅前）から取って来ていた。また、瓦工場の機械を利用して精米所も経営していた。

瓦工場が閉鎖すると、精米所は石川逢清氏宅前に移転した。

### 落合盛吉

寺之門生まれ。久我山大学教授（昭和二十一年）、玉川大学教授（昭和二十四年）を歴任。農学博士の学位を獲得し、昭和三十一年四月に農学博士の称号を得る。その後、千葉大学教授兼東京女子大学教授を兼任（昭和三十五年）、名城大学教授（昭和三十九年）を経て、昭和四十一年教科専門科目理科概論を編集。『ブレークの象徴主義の特質と発展』を発行。

「人生はいらぬいつも春」（最上白雷）の句に似てますます精進し、八三歳にしてアメリカの実態調査研究を行った。

### 永照院悦子

種子島家二一代島主久芳の姉で、非常に気性の激しい女性であったという。日置島津家に嫁入りしたが、種子島に帰ってきて気ままに生活していた。自らを男の生まれ変わりだと言って、終始男として振舞い、武芸を学び、馬に乗って山で狩り、海で漁をしていた。浦田にカツオの餌になるキビナゴが取れることを知ると、浦田に飯屋を建て、浦田の人たちを説得、激励、自ら先頭に立って指揮、かつ従業した。これが種子島におけるカツオ一本釣りの始まりである。大漁が続く浦田も豊かになり、釣りを主体とする漁村として成長していった。浦田の人たちは永照院の恩恵と徳を忘れることなく住居跡に記念の石碑を建て毎年満釣祝いをして、敬慕の念とともに報恩の心を表していた。しかし、中川の浦島三郎氏宅と伊藤操氏宅の間に建てられてい



原捨思先生頌徳碑

たというその石碑は、現在は見当たらない。

### 原 捨 思

浦田エビス神社入り口に、原捨思氏の頌徳碑が建てられている（昭和四十九年十月吉日）。全国漁港協力会副会長、鹿児島県漁港協会の副会長を務め、種子島地引網によるキビナゴ漁

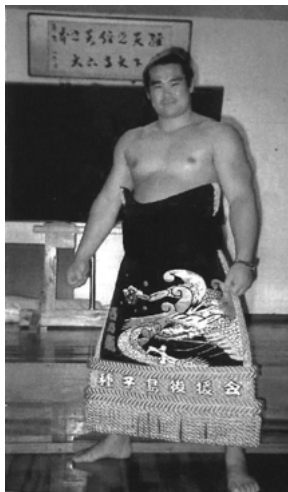
を指導、また、魚専用の原ソーケ、イワシ網等の新しい漁獲方法を導き、さらに浦田漁港の第四種港認定に力を注ぐなど、種子島及び浦田漁業振興に貢献した人物である。兄の原耕氏は夫婦とも医者で、医者の仕事は妻に任せて自らカツオの大型船を建造し、昭和二年には日本漁船で、初めて赤道を越えて漁場の探検を行うなど、南方源漁場開拓の先駆者である。また、国会議員を務め、農林省や拓務省の援助を受け、インドネシアにカツオ漁業基地及びカツオ製造地としての薩摩村を建設したが、マラリアに罹りインドネシアで死去した。薩摩村は、実弟である原捨思が引き継いだがうまくいかず、昭和八年八月に営業停止になった。

### 水口兄弟

『国上郷土誌』の商工業の項に、「水口三兄弟は大正二年に伊集院桑畑より石工として来島し、西之表港築港の工事に従事した」と記されている。西之表の築島（岸岐）は女殿様の松寿院が波止改画を立て、文久二年（一八六二）七月に完成しているが、大正二年、松寿院改修の築島（岸岐）をさらに延長することとし、同五年に県の事業で延長波止場の改修工事が行われている。その頃、伊集院方面には石工業者が多く、石工の仕事が出ると集団で出向いて仕事をしていたことが記載されている。その後、水口兄弟は旧種子島中学校の石垣の一部工事や西之表―馬籠―桜園―中目線の工事に従事するうちに国上に定住した。また、浦田神社下を流れる川と海との間の石垣も水口兄弟が築いたものである。

### 常の山（西乃龍）

昭和三十八年一月二十九日生。国上久保田出身で、本名・下村重和。出羽海部屋に入門し、同五十五年七月初土俵。「西乃龍」の四股名で同六十三年三月十両。本市とし



常の山（西乃龍）

ては三三代横綱西ノ海以来、実に七〇年ぶりの関取が誕生した。平成二年（一九九〇）には、西乃龍種子島後援会から化粧まわしが贈呈された。翌三年一月「常の山」と改名し、同年三月新入幕。一八二センチ、一一七キログラム。前頭一二枚目を最高位に同五年一月限り三〇歳で廃業。同十一年十月、大阪市中央区千日前に「ちゃんこ西乃龍」を開店している。

第八節 年中行事

一 月

一日 奥神社元旦祭 / 十五日 奥神社射場祭

三 月

十五日 浦田神社例祭

四 月

三日 春季戦没者追悼慰霊祭 / 二十三日 浦田海水浴場  
海開き / 二十八日 臨時区会

六 月

十日 定例区会

七 月

十五日 浦田神社夏祭り

八 月

十一日 国上夏祭り

九 月  
第一日曜 区民体育祭

十 月  
十日 定例区会 / 二十三日 浦田神社願成就

十二月  
二十八日 ふれあい朝市

### 奥神社の射場祭について

昔は島主をはじめ、山奉行や行司等家来が赤尾木から来て、狩りや山祭りが行われたと伝わる。一七〇〇年頃には、栖林久基公が観世音様三神を勧請しており、奥神社の例祭日には島主、家老が参拝し、弓道を奉納したという由緒ある射場祭である。現在も一月十五日に行われている。当日は午前中、射場祭の祭典が斎行され、祭典終了後境内に高く築かれた砂山の中央的に置き、砂山の周辺には矢来が組まれ、杉の葉をさすなど古式ゆかしい雰囲気の中で、参加者全員が弓矢を放って奉納する。

本的とは別に板(仮的)を立て、板に命中すると幸運な年になると言われている。また、射場と的場の距離も正式に近いつくりで、中高生の弓道部や市弓道連盟の人たちの参加もあり、盛り上がる。射場祭は「農事のお祝いと破魔祈禱」の祭りであると伝わっている。国上には正月に迎えた神力を仰ぎ、農事の

円滑の予祝いをする習わしがあった。

一月十四日の夜から十五日を小正月又はサクの祝いといって、子どもたちが各家をまわり、コノミヤジョウの歌を歌って祝い、各家では貝の汁を作り農具に供え、農事の円滑を祈願した。奥集落でもサクの祝いがあり、コノミヤジョウや貝の汁を作って、射場祭の後で振舞われることもあった。

奥集落では一月十四〜十五日頃に、破魔の祭りといって、神々に祈禱し、狩りの弓矢を放つ祭りも行われていたと伝わっている。現在は、農事の祝いと破魔祈禱の祭りが一緒に行われるようになった。



奥神社の射場祭

## 奥神社と山祭り

『種子島家年中行事』によると、奥神社付近は、昔種子島家の鹿倉になっていて、七つ鹿倉があった。初午の日には島主を初め山奉行、行司（犬使い）など家来たちが赤尾木から来て初狩りを行った。

初狩りの際は、シカ倉ごとに、一番高い岳で奥の御山の方を向いて祭りが行われた。その前夜は神主宅に、村役人・行司・山役人が集まって祈念し通し、真夜中頃奥の御山を参拝した。

その後一旦家に帰って、餅一つを突き刺し笹包みにし、竹筒に白酒をいれて朝早く山の神にお供えして祭りが始まる。神主が白衣を着て山神に祭上文を上げる。祭りが済むと皆に白酒を振る舞い、それから狩りが始まる。集まった人たちは森に分散して、シカの通り路の「間伏し」に待ち伏せしていると、行司たちが犬を使ってシカを追い出してくる。間伏しに来たシカを射手が射止める。この狩りで獲ったシカは、七匹と半分は国上村に与える。朝のうちに獲ったシカを木にかけて行司が椎の柴でたたくという儀式を行った。この日最初に獲ったシカは頭を射手に与える習わしでその半分は村に与えた。一匹も獲れなかったときは「その翌日直狩り」が行われた。また、「正月初め直し狩り」といって、もう一度狩りを行った。「七匹と身の片平かたひら」

の民話が伝わっている。

## 笹の宮（笹明神浦田神社）

笹の宮は浦田神社の始まりの神として、古くから小島に祠を設けて祀られていた。『大隅国神階記』に、従五位上明神九前笹明神浦田神社と記載されている。従五位の神階位を授かった神であることが確認できる。

小島が神格化・聖域化され、信仰畏怖の対象として人々が崇敬してきたのも、笹の社があったからである。宮司宅に古ぼけた泥人形と神様の衣と言うボロボロになった布がある。この布を「みぞ」と呼んでいた。よく見ると竹の模様入りの竹垣を表している。浦田の神様を「笹の宮」と呼んだ証拠であると古市宮司は言った。口碑では、小島の社殿の辺りは笹が茂っており、『古事類苑』に記載されている「笹のお宮」の由縁はここからである。ご神宝として笹の宮入りの「御神衣の切れ端」があり、宮司の『財産台帳』によれば「口碑ノ伝エルトコロニ由レバ祭神着服ノ祈念ノ切レニシテ神代ヨリ出来セル者ナリト縮緬地ニシテ絹糸ニテ宮殿ニハ玉笹アリ」と書かれている。（平山武章「浦田神社考」）

浦田神社の宮司宅に神様の御衣と呼ばれる笹の宮入りの絹の衣の切れ端と、人形に犬のように頭が横についた首がある。下野敏見氏によると、御衣は相当古くボロボロになっている。人形の首は赤い素焼きの土師器。首がついているのは帰伏匍匐の

礼を表し、随分古くて浦田神社に伝わる神宝である。

国上中学校が創立されたとき、初代校長の武田先生は、子どもたちが若竹のようにすくすく成長することを願い、笹の宮の笹をアレンジして校章を制定されたという。

国上校区の先人たちは、校区行事の挨拶で「笹の宮の由縁、文化発祥の歴史と伝統の国上」と言うフレーズをよく用いた。笹の宮は一番古い神として、国上校区民にその由縁が語られ、崇拜されてきた神様である。

平山武章氏は「古事類苑に記載されている笹のお宮とはこれである」、下野敏見氏は「笹の宮入りの絹の切れ端と奇妙な人形は素焼きの土師器で浦田神社に伝わる宝物(神宝)である」と、風化することなく大切に伝承するように言葉を残した。

笹の宮は、従五位の神階位を授かった笹明神であると考えられる。しかも、笹の宮入りの浦田神社の神宝が現在も保管されている。これまでの文献では、浦田神社の前身の神とあるだけであり、安永八年(一七七九)に書かれた縁起書の稲作発祥の神が誇張され、笹明神の貴重な歴史が風化されつつあることは否めない。貴重な歴史として記載し、後世に伝えていきたい。

#### 奥神社の山神観音様の勧請(栖林久基)

久基が奥神社に観音山神を勧請したことが「奥神社由緒」に記されている。栖林久基は寛文四年(一六六四)から元文六年・寛保元年(一七四一)の一九代の殿様で、からいも伝来は元禄

十一年(一六九八)、栖林の号が付いたのは享保二十一年・元文元年(一七三六)の事である。それから約一〇〇年後の文化十四年(一八一七)に『御家年中行事』は編集されている。このことから奥神社の山神に久基公が観音様を勧請したのは一七〇〇年前後であると考えられる。

#### 喜志賀美権現宮の由来

『種子島家年中行事』に「国上の岬に御山と唱えし山あり、その山中に神社の古跡あり」とある。この山で塩除けの祭事がある時は、島主も来馬で参拝した。参宮の時、鞍をかけた松の木を鞍掛の松と言い、鞍をかけた場所を鞍掛の平と呼んだと伝わっている。神社の古跡のある山は、奥神社や太平洋が一望できる場所で、平坦部に喜志賀美権現が祀られた古跡や周りには石垣が築かれた跡があり、境内付近から土器片も出土した。また、鞍掛の平と呼ばれた境内近くの西側に三町歩の「宮内」と呼ばれる神田がある。



奥神社の拝殿裏

喜志賀美権現は、門倉岬の島尾大明と一対をなす潮風を除く神様として祀られていた。古くは『懐中島記』に、また灯台のある丘に祀ってあったという説もある。権現宮と呼ばれているが、古くから御崎の山中に塩除けとして祀られていた神様に仏菩薩の影響を受け、いずれかの時期に権現化して喜志賀美権現と呼ばれるようになったと思われる。また、史書による御山とは江戸時代の山の尊称とあり、島主参拝の塩除け山や、神仏が祀られた山を江戸時代に御山と呼んだと記しており、喜志賀美権現の古跡の山を江戸になって御山と呼んだと思われる。御山のあたりは夕方近くになると、白い鳥が飛び立ち、山の神様が鳥になって飛び回るということで久保田の人にとっては恐ろしい場所であった。

#### 喜志賀美権現の合祀時期

『年中行事属類雑記』によると「観音様社殿山中にあり。栖林様勧請、喜志賀美権現様。奥の御山タブの大木依木として同所安置あり」と記している。山中神祠二基のうち一つの石祠は、法華寺の奥山・中山・山口の三観音様を栖林久基公が勧請した神様で、サンゴを積み重ねた祠は喜志賀美権現で、岬の御山から合祀したものであると記してある。ところが、「喜志賀美権現の御本社は岬の御山相違あるべからず、何の訳にて、奥の御山へ移し山神観音と同所に祀らせ給ふ。ご旧記にも見及ばぬ事也」と記している。久基が奥神社の山神に法華寺の観音様を勧

請して神仏習合の神社とした後、「何の訳あって奥の山神と同所に祀るのか」という中、塩除けの神である喜志賀美権を合祀させている。久基の一七〇〇年前後の出来事で近世の頃である。『大辞林』によれば御山とは、江戸時代幕府や藩が管理する山で、御山、お林山、鹿倉山、風除け山、塩除け山、砂除け山等を御山といい、特に山中に神仏が祀られ、修行場があったりする山の尊称である。また、宗教上の霊地としての山を敬って呼ぶ。江戸以前は、山を「岳」や「御岳」と呼んでいたようである。

#### 国上奥集落、春山家に伝わる瓦製厨子

国上奥集落の春山和敏氏宅に瓦製の仏壇厨子が伝わっている。瓦製の厨子は珍しく、いつ頃作られたかわからない。種子島は一代島主時氏の頃から明治二年（一八六九）までの約四〇〇年間は法華一色の時代で、春山家も江戸時代までは法華宗であったが、廃仏毀釈を経て神道に変わっている。春山家の厨子は江戸時代法華宗の頃のものと思われる、江戸時代の瓦屋によって作



春山家の厨子

られたことになる。

厨子には柄付き銅鏡（藤原光永銘入り）円形の薄型銅鏡と曼陀羅が供えられていて、法華宗のものである。市内にはほかに木製の厨子（先祖棚）に柄付き、曼陀羅が供えられたものがある。

国上において、ほかに二、三の柄付き鏡（藤原姓入り）が見られる。

#### 国上奥集落、岡本家に伝わる金毘羅宮の信徒壇

国上奥集落の岡本和美氏宅は法華宗の檀家である。法華宗の仏壇の上に、金毘羅様と呼ばれている信徒壇が置かれていて、朝夕お参りされている。金毘羅様は航海の神である。神仏習合で権現宮となり、明治初期の廃仏毀釈で神仏の分離がなされている。なぜ岡本家に安置されているのは不明である。

信徒壇の中には、小型であるが丸い厚みのある銅鏡が供えられている。

#### 奥神社に伝わる藤原光政光長製作の柄付き鏡

奥神社に、国府創置の際皇子と官人が携えてきたとされる二面の柄付き鏡があったが、一つは盗まれたとされている。大山祇神が御神体としている鏡には藤原光政の銘があり、木花咲耶姫の御神体の鏡には、藤原光永の銘が記されているとあると奥神社由緒に記されている。大宝二年（七〇二）〜弘仁十五年・

天長元年（八二四）頃のことになる。

『御家年中行事属類雑記』によると、奥神社の山中神祠二基のうち一基は観世音と言われる神様（仏様）を栖林が勧請したとき、奥山観音中山先手観音山口十一面の観音様と彫り込んだ鉄板並びに柄付き鏡二面をご神体にしたと記されている。西暦一七〇〇年前後のことになる。

奥神社の二面柄付き鏡を制作した藤原光長は宝永六年（一七〇九）から文久二年（一八六二）の江戸末期まで、光長を襲名した鏡師であることが「鏡師明記集」で紹介されている。光長が鏡師として制作した鏡は相当数に上り、美術品としての価値はあまりないとされている。

上記のことから柄付き鏡は、江戸中期（一七〇〇年代）に藤原光政・光長が制作したと「鏡師明記集」に記されている。『御家年中行事属類雑記』に、栖林久基が観音様を勧請し、山口・中山・奥山の観音様を彫り込んだ鉄板と二面の柄鏡をご神体としたと記していることから、奥神社の二面の柄付き鏡は、西暦一七〇〇年前後のものと考えられる。

#### 喜志賀崎の馬頭観音

島内の岬には、島尾大明神（門倉岬）、島間八幡宮（島間崎）、喜志賀美権現（国上の岬）があるが、国上の岬一帯は広大な殿様の御牧（牧場）があった。寺之門の落合氏の先祖が手に負えない暴れ馬をとらえて、殿様の所へ乗り付けた褒美に岬の牧場



喜志鹿崎にあった馬頭観音



馬頭観音に奉納されていた銅鏡

が与えられた。落合氏は一人では管理が大変だったので、五〇人を募って管理をしていたが明治十二年の地租改正で牧は廃止され、土地は次から次へと人手に渡り戦後牧場としての姿は失ってしまった。以上のことが『国上郷土誌』に記載されているが、その後の記録がないのでここに追記する。

落合氏と五〇人の氏子に与えられた御牧は浦田の小島から喜志鹿崎一帯の二二町歩に及ぶ広大なもので、管理も大変だったため、二二町歩に立っていた松の木を売買し、大正三年（一九一四）に神戸の商人高田三郎氏に北側の一反歩の土地を残して全てを売り渡した。そのとき、馬頭観音は売らず北側の山林の崖下に遷座させた。

大正元年、鹿児島高等農林学校（現鹿児島大学農学部）の牧

場が創設され、昭和四年（一九二九）には種子島酪農組合が設立、昭和八年に新高ドロップ工場が設立され酪農振興が高まりつつある頃、高田は喜志鹿崎に乳牛と豚の牧場を作っていた。その頃、高田は桜園で澱粉工場を操業していたので、澱粉粕を利用して飼育していたという。

第二次世界大戦が始まると、種子島航空基地喜志賀防備衛所が設置されることに伴い、五六〇〇平方メートルが貸地とされ、八つの営造物が設置された。終戦後の昭和二十二年頃、日本の農地改革制度が始まり高田氏の土地は、浦田・久保田部落に払い下げられた。その後、個人に配分されている。

馬頭観音の祭典は、平成二十八年（二〇一六）まで北側の山の崖下で行われていた。氏子が二人一組の当人（世話役）を務め、馬の耳に似たナガマキを供えて、毎年祭典を行ってきたが、高齢化が進んだことで氏子も少なくなり、平成二十八年八月の祭典を最後に、国上校区が引き継ぐこととなった。馬頭観音は浦田海水浴場近くに遷座された。島内には六二カ所の牧場と六カ所の御牧があったが、乗馬姿が刻まれた銅鏡は、喜志賀崎の銅鏡だけのようである。

#### 浜田家の貫門

天文十二年（一五四三）の禰寝戦争で種子島は敗れ、屋久島を割譲することで和睦した。翌年屋久島を取り戻すため、屋久島にいた禰寝兵を攻め、逃げる禰寝兵の船底の栓を抜いて沈没

させた。船底の栓を抜いたのは、浦田の浜田家の先祖で、恩賞として漁師の身分で貫門を立てることを許された。

貫門に関する次のような民話が残されている。

浦田の一人の男が、根占兵の船の底板を抜いて、船を沈めたそうです。その後で、殿様が「褒美として何が良いか」とおっしゃった時「着物の紋をください」というのを、丁寧な言葉を使おうとして「ごもん」をくださいと言ったそうです。それを殿様は門と聞きまちがえて、貫門をあてましたそうです。そのことは後になってから、浜田家にも伝わっていたそうです。（『種子島研究』二号）

### 国上寺之門の墓地「オコンソン」

落合本家（伊東家流）の墓地の場所をオコンソンと呼んでいたようである。落合本家の墓地の隣に、五輪塔の形に似た一对の石塔と五基の自然石が建てられている。その中間に平らな敷石がなされ祭場が作られている。『種子島碑文集』にもその石塔群が手書きで描かれている。五輪塔に似た一对の石塔は山川石で作られており、一基の石塔に「宝暦七年六月二十九日」、もう一基に「七月十九日」と刻まれている。落合本家の五輪塔に似た一对の石塔と五基の自然石の間に作られた祖霊の祭場には、葬式の後棺を置き、「これから仲間入りするからよろしく」と言っただけで『種子島碑文集』に記してある。また、お盆にはケナーが本家の祭場に集まり祖霊の供養も行われていたと

いう。

### 国上のガロー山（ガラン）

森の中の大木を依木として、神を祀ったところを「ガロー山、ガラン山」と呼び、山の神や田の神、地神、水神等を祀っていた。聖地とされた山にみだりに入ったり、木を伐ったりすると祟った。また、川や井戸の周辺を汚損したりすると祟った。祟られたら巫女バー（おばさんの意）を頼んでお祓いをしてもらうと、不思議と治ったという。寺之門に巫女をしている女性がいる。昭和四十年頃までお祓いを頼む人もいたという。

『西之表市の伝説』によれば、国上にはガロー山が五カ所、田の神山が一カ所、山の神が三カ所あった。

### 中目のガロー山（二カ所）

中目のガランは遠園の田の上にあった。以前は遠園ガランと言って、芝関祐氏が祀っていたが、現在は木を切っており、跡はない。木を伐採すると祟られたので、お祓いをしてもらい、山の神を祀った。「遠園にガランがありガランの木を伐つたら祟ったので、物知りを頼んでお祓いをしてもらった」とする説もある。

### 寺之門のガロー山（二カ所）

寺之門の園田に河内氏の屋敷がある。その北側にガロー山があり、山の神だから入ってはならないと言われている。近くに田があり、下に寺の川（寺ンこう）という泉があった。

もうひとつは、次のとおりである。旧国上中学校から柳原の方へ一キロほど行ったところから右へ入りこんだ所にガロー山がある。ガロー山の下に田があり、「山の神田」といって寺之門神社の神田がある。神主になった人が稲を作り、秋には初穂を神社に供えていたが、昭和三十八年頃作らなくなった。

#### 湊のガロー山（二カ所）

湊集落の字「内の湊」の田の先の方にガロン迫というところがある。田の近くには畑もあった。昔は人家はなかったが、現在はそばにある。

#### 喜志鹿崎のガロー山（二カ所）

昔、岬に潮風を防ぐ神様を祀った山があり、御山と呼んでいた。近くに宮内田という神田がある。御山に人が近づくと、白い鳥が飛び立ち、神様変わりの鳥として恐れられた。

#### 太田の伝説

国上の太田は、渡来人の「良うん」と「明うん」という夫婦が住みつき、水路を作り、田を作ったのが始まりと伝わっている。良うんと明うんの夫婦は太田川の上流をせき止めて、北側の山中に水路を作り、太田の共同墓地のあたりから太田に水をひいて水田を作ったと伝わっている。

水路を作る途中に大きな岩が出た。その大岩を砕くため夫婦で、岩を薪木で覆い、火を燃やして岩を焼き、焼いた岩の上から水をかけることを何回も繰り返して、岩を砕いたという。ま

た、水路は一キロ以上の距離があり、高低差を測るのは大変であったが両方の山に火（タイマツ、蠟燭）を灯して高低差を測ったという話が伝わっている。

寛姓は静岡からの移住者である。伊関と太田の間の山を売りに出している新聞広告を見て、種子島に買いに来た。この山は昔、馬牧であった。近くの字アカギハラに牛牧もあったが、山犬が犢（子牛）を食って牛の首だけがいくつも残っていたので、そこを牛首山と言って、大変恐ろしい場所であった。牛首山の近くを西平と呼んでいた。

太田には八幡様を祀った小祠がある。昔は弓矢と丸い鉄があった。湊のエビス様は太田の八幡様の分神で、昔は太田の人たちが参拝していたが、満潮になると川を渡ることができず、参拝できなくなるので、湊に与えた神様である。

太田の八幡様の木を切ったりすると、山の神様がトントントントコトントコトコトコと太鼓を叩いたと伝わる。

太田の五葉松が立っている下の方に梅の木が立つ平らな場所がある。寛家が移



寛家移住百周年記念碑

住した当時の住宅地であったことから、元屋敷と呼んでいた。また、寛家は移住当時キノコを栽培していたので、寛家のあたりをナバヤマと呼んでいた。キノコを「ナバ」とも呼んだ。また、寛家が現在地に移転した後に、与論島から「杉家」が太田に移住してきてしばらく暮らしていたが、その後伊関の小浜に移住した。

昭和二十七年頃、太田から一〇〇坪先の塩田家の宅地があった先にダムを作り、水車で家庭に電気を灯し、精米もした。国上の各方面から精米に来る人がいた。

長野勝氏宅入口に製鉄の焼き窯があった。市が製鉄所跡の石柱を建て、映画「伊豆の踊子」の監督を務めた五所平之介がPR映画「鉄砲伝来の島 種子島」の制作のため製鉄について取材するために太田を訪れた。

また、司馬遼太郎原作の『街道をゆく、種子島道』の制作において、太田の製鉄所跡が取材された。

かつて太田浦（字高波）は海であったと伝わっている。太田の河川工事の際、深町あたりの川から、カキや二枚貝が無数に出土した。

大平見から国上校区の山林を通る林道の途中に、国上校区の杉山と柳原の墓地やグラウンドの裏山との谷間を川が流れている。その柳原のグラウンドの裏山周辺を柳原の人たちは西平と呼んでいた。

千人塚線の農道作りで、神山付近の農道の法面に人骨と金銭

が一〇枚ほど出土した。本市の調査で、唐人の人骨と唐銭であることがわかった。このことと関係あるかわからないが、『種子島家譜』に「天文八年（一五三九）に唐船が湊に漂来し全員死す」とあり、救助行き届かずとの島津の怒りに、種子島家は罪のない平山備中を切腹させている。そのとき太田に財貨を運び、唐人を太田の山中に埋めた。太田の侍も責めを負い切腹した。その武士の墓石は無名のまま建てられていたという話が太田に伝わっている。

#### 千人塚と禰寝戦争

太田の北西の山に、昔松の木が林立していたと言う緩傾斜地がある。現在は畑となっているが、そこが天文十二年（一五四三）三月二十二日に禰寝兵と太田侍が戦い、戦死者を葬った場所、土を盛り上げた上に自然石が建てられていた。現在は道路の入口近くに移転している。禰寝戦争の発端は、「一三代恵時は浪費が過ぎる殿様で、戒めて欲しい」と親戚関係にある禰寝重長に頼んだことである。禰寝重長は、二百数十人の兵士を率いて三月二十二日夕方浦田港に着いた。禰寝兵は、赤尾木に向かう途中、太田に攻めて来た。太田の千人塚近くの狭間を通りかかる頃を見計らって、太田侍七、八人が夜襲をかけ、壮絶な戦いになった。禰寝も兵を失ったが、太田侍は二〇〇人余りの禰寝兵に撃退された。太田侍の大将は、部下の侍を地の利を生かして逃がし、一人留まり立ちふさがった。太田侍大将の剛

腕ぶりに禰寝兵は苦戦したが、力尽きて禰寝重長の前で戦死したと伝わっている。しかし、禰寝兵が千人塚で太田侍と戦ったという記録は『種子島家譜』には見当たらない。

禰寝兵が「何を食べていれば、このように力があるのか」と侍の腹を割ってみたが、腹の中は僅かな稗ばかりであった。それを見て哀れみ、持っていたにぎり飯を腹の中に詰めて葬ったという。太田侍の強さをたたえた話が残されている。

約五〇〇年前のことであり、現在に至るまでに様々な事柄が語り継がれ、次にあげるような誤りも見られる。

一、寺之門の日高隠岐守が太田に住み、千人塚で戦ったというが、日高隠岐守は安納の人で赤尾木城の前で戦って戦死している。

二、太田侍が九九九人を殺し、死んだふりをしていた人に切り殺されたという話があるが、禰寝兵は二百数十人。

三、日高隠岐守の墓は寺之門にあるとされているが、日高隠岐守は安納の人で一三代恵時の家老。日高紀伊守宗俊が寺之門の人であり、一四代時堯の家来で、墓は寺之門にある。

四、日高隠岐守主従四人力戦。敵を殲滅して亦戦死す。昭和七年建之とする碑があるが、日高隠岐守は赤尾木城前で戦死していて、『種子島の史跡』に「千人塚の碑文は間違いである」と記されている。

五、恵時が仮屋を作ろうとしていた畑がある。

『種子島家譜』による

と、「禰寝重長、兵を率いて三月二十二日の夜浦田に至る。二十三日国上を発し大峰、櫛の峰を経て新城の坂口に至る。時に日高隠岐守とその弟および従者二人出て戦った。敵を殺すこと十余人。

た。敵を殺すこと十余人。ついに四人戦死す。敵進んで内城を囲み、急に之を攻める。…中略…各々

奮戦して敵四七人を殺す。吾が戦死する者、国上四郎・鮫島図書・日高甲斐・有留伊賀・長野兵左衛門外十余人。鮫島最も強戦し、敵を斬ること数人、深く敵中に入り戦死する。長野は禰寝龍善と戦って死す」と記されている。

#### 桜園馬頭観と草競馬

桜園の神社前一带は、昔牧場があり草競馬などが行われていたようである。現在でもその面影を残す長い直線道路があり、その端には馬頭観の石碑が建っている。現在は半分近くが草で覆われているが、直線で約二〇〇〜二五〇メートルくらいある。草競馬が行われなくなっただけから、運動会の練習などをしてきたそ



太田の千人塚

うである。

### 国見山の笛の音

国見山には、秋の彼岸の夜にこの世とは思えないほど美しい笛の音がしてくるといふ。その音が聞こえてきたら、人々は皆かぶり物を取らなければならない。そうしなければ病気になるという。その笛の音は山頂から起り、次第に下って海に入り、潮を浴びて、また山を登っていくと言われていた。現在はそういうことはない。

### 浦田小島の調査

昔は歩いて三〇〇〇歩と言われ、島であったとする説もある。『国上中学校創立三〇周年記念 秋の一日遠足郷土めぐり』によると、小島については、次のような民話が残っている。

昔、浦田の湾には、今の小島はなく海であった。男神と女神は向い側に島があったら、人々がどんなに助かるだろうと島の出現を念じた。一夜が明けて沖を見ると忽然と島が現れた。「おさよ起きてみよ浦田の小島、根から生えたか浮島か」と唄われた。

小島は、現在でも広葉樹が茂る密林で、市指定の「ヤッコソウ」の自生地でもある。小島には浦田神社の始まりの神、「笹の宮」や稲作の神「ウガヤフキアエズ」の尊が祀られている神聖な山として人が入ることさえ禁じられていた。ただ、一年に



浦田小島



小島のヤッコソウ

一回旧暦十二月十五日（願成就）の前夜のお通夜の晩だけは、社前に焚く薪木として小島の森から採り出すことが許された。それ以外の日に小島の植物や石ころを持ち出すと祟りがあるとされ、信仰畏怖の対象とされてきたことから、長年未調査のままであった。令和二年（二〇二〇）、国上校区誌編纂委員と市関係者が三月と十月に調査を行った。山の中央部から右側の椎の大木の根本周辺に多くの「ヤッコソウ」が見られた。山の中央部から浦田湾に向かって下ったところに境内の跡と思われる平坦な場所があったが、礎石や神跡の跡はみつからなかった。また、「笹の宮の宮殿に玉笹あり」と記載の文献があることから、竹を探したが竹山はなかった。さらに、ウガヤフキアエズの尊



楠川村牧家の墓石

が鵜戸を遙拝したとされる大岩らしいものがあったが、大石は山の中央にあり、遙拝するには無理な場所であった。

浦田の濱松次右衛門氏によると、小学五年生の頃小島に上ったところ、山頂付近は平坦で運動場のように広く、小さな草がポツポツと生えていた。広さは五<sup>坪</sup>ほどで、周囲は山林に囲まれ海は見えなかった、片隅に二、三段の石積みがあった。

『種子島研究』には、浦田の古老が話した記録があり、「ウガヤフキアエズが遙拝した大岩は小島の西側にある。そこからは大隅から宮崎を望むことが出来る」と記している。

また、伊東安年氏による「小島と笹の宮」の記事には「山の中央部に平坦部があり（山頂の中央部）境内は一七七五坪で西方にウガヤフキアエズの命が遙拝した大石がある」と記されている。

『西之表市年表』に、「一四六三年浦田神社創建、境内は一七七〇坪五」と記され、約五<sup>六</sup>坪となる。

濱松氏の記憶、伊東氏の記事、『西之表市年表』による記述が一致している。

また、令和二年の調査では、小島の東入口の山中に

三基の墓石を発見した。聖域化された小島に墓が存在することが奇妙であるが、刻まれた文字から、屋久島の楠川村の人の墓石であることがわかった。

#### 安徳帝の浦田滞在（生存潜幸説）

安徳帝は、平清盛の妻二位尼に抱かれて、壇ノ浦の海中に身を投じたというのが定説であるが、生存潜幸説が全国一八カ所にあるようである。海中に身を投じたのは替え玉で、身代わりは大納言時彦の娘であったという説がある。「山所大権現宮鎮座本記」によると、安徳帝は重盛の弟である二子資盛・有盛・行盛等を従え豊州日州沿岸を進み、内之浦に着御したが、源氏の追手が来ると聞き、急ぎ船出した。風に遮られ浦田に漂着し、七日間滞在したという。当時種子島には、上・中・下の三郡があり、大江・淡路・沼津の三史がいた。島司の大江は、事の次第を知り、船を漕泊に回し、背後の「王の山」の山中に帝を奉じ、ねんごろに慰め奉ったことで、鎧一領・安綱の太刀一振・黄金五〇〇両を賜り、武蔵守に命じられた。大江はこの島も安全とは言えないので安全な場所に逃げるべきと言い、資盛等は再び内之浦に引き返した後、硫黄島に落ちのび、この島で崩御された。硫黄島には安徳帝をはじめ従者たちの墓も存在するという。漕泊の安徳川、安徳橋もこの安徳帝伝説にちなむ。

## 御田植祭り

昔は浦田神社の前は全部神田で、浦田浦と呼ばれていた。明治十年頃までは全校区民が浦田に集まり、盛大に御田植祭りが行われていたと伝わる。青年たちは新しく作った紺の着物を着て、御田植歌に合わせて田植えを行った。浦田神社の田植えが終わった後、国上校区民の田植えが始められたと伝わっている。

御田植祭りには、西之表のふもとの侍たちも参加した。当日は無礼講で侍たちの羽織袴に泥のついた苗を投げたり泥を飛ばしたりしたという。逃げるとどこまでも追いかけて、顔に泥を塗ってもいいことになっていた。御田植祭りは、明治の初め頃まで毎年行われた。その名残として祝事があるときは、カマドの煤をつけた、ボロ切れを孟宗竹で作ったタバコ入れに忍ばせ、踊りながら参加者に塗り回る風習が寺之門にあった。西門ウメ氏の芸は名人芸と言われたが、伝承者がなく廃れてしまった。

## 御田植歌

今日この田で参りもうたが 明日はどなたと参りあおうか  
ちくらの沖の種子島 七草を十草に分けて

浦田大明神の御始めなされた御田植じゃ

作りはじめます 作りはじめます

## 第一〇節 史跡・神社仏閣

国上校区には、浦田神社・奥神社・湊神社・久保田神社・桜園神社（沖永良部、桜島）・白石神社・寺之門神社・中目神社がある。

浦田神社と奥神社は社格制度の時代、列格の神社として国上の村社とされた。浦田と奥両神社は神社庁に登録された神社で、毎年神社庁に連盟費を支払うことになっている。さらに二〇年に一度の伊勢神宮の式年遷宮には、神社庁から負担金が割り当てられる。

浦田神社は種子島で一番古く、笹の宮が始まりとされている。その後稲の浦田大明神として崇拜され、一八〇〇年頃には、熊野神社の次に参拝者が多い神社であったようである。

昔から浦田神社の祭典が終わらなければ、他集落の祭典はできなかつた。祭典順序は、一番浦田神社、二番奥神社（浦田の翌日祭典）、三番寺之門神社（奥の翌日）、四番中目神社（寺之門の翌日祭典）と、それぞれ一日遅れて祭典が斎行さ



湊神社



浦田神社

浦田神社は種子島で一番古い神社といわれ、創建時は小島にあり、船で通い祭典が斎行されていたという。そして現在の浦田神社と考えられるが、笹の宮は小島に祠が設けられ、古くから国上の一番古い神様として祀られていた。現在も「笹の宮入りの御神衣の絹の切れ端」と「赤い素焼きの土師器人形」が神宝として伝わっている。さらに、神階帳、大隅国神階位帳にも記載され、神階位を授かった神様であることから、長期間笹明神が祀られていたと考えられる。

れてきた。浦田神社の願成就は国上の総願といって、総願が終わってから、他集落の願成就が行われた。湊神社は塩釜神社である。種子島で一に西之の立石、二に国上の湊と『種子島家譜』に記されており、歴史のある神社である。

### 浦田神社

#### 『浦田神社由緒』

浦田神社は種子島で一番古い神社といわれ、創建時は小島にあり、船で通い祭典が斎行されていたという。

浦田神社の始まりの神は笹の宮（笹明神）、次が浦田大明神、

小島に浦田神社が創建されたのは寛正四年（一四六三）で、その二年後に三島法華改宗が始まる。法華改宗は律宗門徒の篤い信仰者や山岳修験者等の反発があるなか、強行に改宗が行われている。浦田神社でも争いが起こり、「仏教は榮え神道は衰微し、楼閣は破れ宮殿も崩れ浦田神社は朽ち果て、二百余年烏有の如」と『浦田神社由緒』には記されている。元文三年（一七三八）に市平衛などによって小島から現在地に移転再建する前の浦田神社の記録はみつかっていない。しかし、『懷中島記』に「草創時代知らず、浦田大明神社領一石八斗余、八月十五日祭礼」とあり、市兵衛が再建する四九年前のことが記述されている。

神階位を授かった笹明神浦田神社は、いつまであったのか、浦田大明神はいつから祀られた神なのかは不詳である。浦田には古くから稲作の伝承があったと考えられ、知覧安右衛門は記神話に沿って種子島の創生や呼称、浦田に稲作発祥を縁起付け、安永八年（一七七九）に『浦田大明神縁起書』が作られている。これによると、ウガヤフキアエズを稲作の神として奉り、妻の玉依姫は赤米の宝満神社の神として奉り、夫婦神になっている。この縁起書は種子島の稲作発祥の由緒を正当付けようとしている。しかしこの縁起書のおかげで稲作発祥地や種子島の呼称、種子島の国造りの始まりなどが浦田に縁起付けられて浦田神社が蘇った。

爾来一六六年目の明治三十七年（一九〇四）八月に、浦田神

社として小島の旧聖域から現在地（国上三四五番地）に新築遷座させた。同四十年十二月十八日に村社に列格されたが、終戦後の昭和二十八年（一九五三）八月三十一日、神社本庁包括宗教学法人浦田神社となった。拜殿は築八十有余年となっており、改築の計画を進め、同五十七年四月、区有林の杉材を使って、翌五十八年三月十五日拜殿を竣工し、神跡を保ち現在に至っている（木造瓦葺九坪）。

知覧安右衛門による縁起書には、種子島の始まりと我が国の稲作起源について記されている。神代の昔、イザナギとイザナミの神が大八洲の創生にあたり、最初に創ったのが種子島であったという内容である。知覧安右衛門の書いた縁起書をもとに宮司の古市秀一氏が大正時代頃に作成した『浦田大明神縁起書』もある。

#### 古市秀一氏による浦田大明神縁起書

昔むかし、その昔、イザナギノ命、イザナミノ命が空にかかった「天の浮き橋」の上に立って「下に島はないか」「天の沼矛」を持ってお探りになった。その雫がしたたり落ちて、一つの島になった。これが淡路島です。お二人はそこにお降りになって、お生みになったのが種子島でした。それから日本の他の島々を次々にお生みになった。その後、ヒコホホデミノミコトがウミガメに乗って竜宮城へ行きました。竜宮城には豊玉姫という美しい女神がおられて、命は何年も帰りませんでした。そこで尊の后は大変心配して

「ああ、あの方は私を捨て何処へ行かれたのでしょうか。私はどうすればいいのでしょうか」と嘆かれ、尊のあとを訪ねて、種子島にやって来られました。そして、こんな歌を読まれた。「誓い路に跡はつきにき、足ひきの亀の尾の上の名もたたるべく」。しばらくして尊は竜宮城から五穀の種子をお土産に種子島の后のところへ帰ってこられ、尊と后は土地を耕し農耕を指導された。この事から「種子島」という名が付いた。これが日本の農業の始まりである。そこで後世の人々は「七草を十草に分けて種子島、波の上にも神は蒔きけん」と歌うて曰く、その後、尊の御子であるウガヤフキアエズの命が日向の国からこの島にお渡りなり、父の教えた稲が衰えかけていたので復興なされた。そして後の人は「汲み上げし波の種子島水かけて神も浦田をまた作りけり」とよみ、又是を以て「種子島」と名付けたと言う。然るに星霜よく積んで日州瀬戸に幸し給いて（玉依姫との間）に男子を産み給う（第四子カムヤマトの命）後に、神武天皇と名付く。そこで、こんな歌がある「皇の美知の通う島なれば人の始めの島にありけり」と。またこれを以て種子島と名付けしとある。その後、稲作が盛んにして、生活の安定を得ました。そこで、ウガヤフキアエズの尊に感謝す意味で宮殿を作り神田を設けて、獲れた米を神様に献上し、神楽の鈴の音、称宣の鼓の音も賑やかに祭りが行われた。浦田神社祭礼は、旧八月十五夜の浦田様といって、

名月より浦田様が有名であった。また、「浦田様のお祭参るよりヤソマを作れ」といって、ソマ作りの時期でもあった。

日本神話では天の沼矛からしたり落ちた雫から「おのころ島」ができ、「おのころ島」にイザナギの命とイザナミの命が降りて二人が結ばれ淡路島が生まれ、日本の島々ができる。その中に種子島の誕生は記されていない。『浦田大明神縁起書』では、淡路島の次に種子島が生まれたと記されている。

浦田を稲作発祥の地としてウガヤフキアエズの命を浦田大明神として祀り、玉依姫は宝満神社に赤米の神として祀られている。浦田神社は白米、宝満神社は赤米で対をなす夫婦神として祀られている。浦田神社と宝満神社の縁起書はほとんど同じで、江戸時代に書かれたものである。種子島の稲作の由緒を正当付けようと、記紀神話に当てはめ、昔からの伝承や記録を参考にして作ったものようだ。

稲は、近年の研究では南方から黒潮に乗ってモミが流れ着いたとする説と、昔から野生の稲があり、選抜しながら質の良い稲ができたのではないかとと言う説がある。浦田には古くから稲の自生があったのではないかと考えられる。

#### 浦田神社運営と周辺の土地

浦田神社と奥神社は国上の村社に列格された神社で、両神社の祭事は各集落から選出された神社係によって、管理運営がなされてきた。ところが、奥集落の要望によって奥神社の管理を

奥集落が行うことになり、神社係は浦田神社を校区の神社として管理することになった。しかし若者の流失とともに高齢化が進み、神社運営も厳しくなったことで、昭和六十年から浦田神社は校区が運営することになった。現浦田神社周辺の土地と山林は、寺之門の落合有三氏の土地であった。浦田は土地が狭く、家を建てる場所がなく困っている人がいたら譲るように、という条件で寄付してもらったと伝えられている。寄付された土地は「県道の東側から浦田集落に入り中川橋から神社入口までの山林と道路沿いに家が建っている土地」と、「神社下の川から上流のシンショウ橋を渡り奥集落に通じる道路を上り県道を横切り、奥道路入口付近までの神社裏山一帯の土地」である。この土地は現在国上校区が管理している。

浦田神社が村社に列格されたのが、明治四十年十二月十八日のことである。寄付をされた落合有三氏は、明治四十四年伊関小学校の校長を退職後、竹材の事業や本土に金山を購入するなどの事業をしていた方で、寄付したのはその頃ではないかと思われる。また、現在の校区グラウンドはもともと落合氏の土地で、馬乗り場といって、軍馬の育成や調教をする場所だった。

落合氏から寄付を頂いた土地には、二十数戸の家が建てていたが、社殿改築の際に、各戸への土地譲渡等の整理を全て終了させた。昭和五十八年、佐々木区長が建設委員長、馬場宗男氏が棟梁として浦田神社拝殿を新築。現在の神跡を保っている。国上校区役員をはじめ、各種団体長の方々も参列して盛大に落



浦田神社の御種子蒔石

成祝賀会が催された。

浦田神社の敷地は、入口の鳥居から拝殿に向かい左の「転法石」のある場所と、「御種子蒔石」のある境内と拝殿、拝殿裏山の巨石の夫婦岩までを神社庁に登録している。

浦田神社は、拝殿だけで本殿はない。拝殿裏の六九段の階段を上がると、神社

の背後の森の中腹に二体の威厳のある巨大岩石がそびえ立ち、巨石の前に立派な造りの祠を設けてご神体代わりにしている。背後の山は個人の山であったため、神山とは呼ばない。

ご神体代わりに設けられた祠は山川石で作られている。屋根付きで高さは七〇センチ前後あり、屋根裏にも小刻みの細工が施されている。塔身の外蓋を開けてみると、中に銅鏡はなく、五円玉を二枚重ねて紅い紐で結んだのもが一組入っただけであった。

祠の塔身の右側に大吉日願主吉兵衛と刻まれ、左側の側面に大明神御宝前と刻まれている。

一对の守護獅子が入口の両脇に配置されている。

太田長野家に伝わる一七三〇年代の古文書によると、神社前

の田浦には人家はなく、浦田崎に一九戸が住んでいて、世帯主も記載されている。神社を再建した市兵衛の名前はなく、祠に刻まれている吉兵衛の名前が見られる。

境内の御種子蒔石、ウガヤフキアエズの命がその上から種(白米)を蒔いた神聖な石である。玉依姫は赤米の神で、浦田と宝満は夫婦神である。

#### 転法石

浦田神社拝殿の左後方に、転法石と刻まれた石板碑がある。享保四年(一七一九)九月吉日尼崎の本興寺の日演という僧の名が刻まれている。刻んだ年に建てられたのか、いつ頃建てられたのかわからない。浦田神社が現在地に遷座されたのは元文三年(一七三八)で、転法石は享保四年(一七一九)で浦田神社より一九年早く建てられていたことになる。

ちなみに、久基は正徳二年(一七二二)に日典の二五〇周年忌を三日間行った。これには多くの僧が訪れたと思われる。宝永七年(一七一〇)に日典の墓石を建て、享保二年(一七二七)に日典寺に土地を寄付。享保十五年(一七三〇)の日蓮の四五〇周年に島主・所寺・檀家が金を出し合い、尼崎本興寺、本能寺(信長)に佳礼、元禄十三年(一七〇〇)頃奥神社に法華寺の観音様を勧請し、神仏習合の神社にしている。このように久基は、法華信仰に篤い。前出のとおり、転法石が享保四年に建てられたとすると、久基の法華信仰に関わるものかもしれない。



奥 神 社

## 奥 神 社 奥神社の由来

笹河鉄郎宮司に奥神社由緒について尋ねたところ、以下のような話を聞くことができた。

現奥神社の葉山の森を昔から「大内山」と呼んでいた。大宝二年（七〇二）に朝廷の官人が皇子に伴い国上の地に赴任し、葉山の森を聖地と定め、大樹のまわりに常盤木を植え、玉垣を結うて「ひもろぎ」として神を祀り、宮中神道の祭式に基づき国府創置を告げ祭祀を齋行したのが、種子島での神道祭式の始まりである。この時、国玉大明神が祀られ、国玉大明神奥神社が創建される。これが現奥神社の始まりである。

また、葉山付近に官人の住所兼仮公治所が建てられた。

その後、本治所（国庁）が国上小学校敷地にできて移転する。その頃古くから高星に鎮座していた大山祇神社（大山祇神尊と娘の木花咲耶姫）は、葉山の国玉大明神奥神社に合祀される。国庁が国

上小学校に移転してもタネ国一の宮大山祇神社と称され、官人たちは朝廷の贈り物としてシカ皮を治めていたと伝わっている。

高星鎮座の大山祇神社が国玉明神現奥神社に合祀されたことは知られていない。享保十五年（一七三〇）頃の国上の古文書によると、奥と高星は別の地域として記載されている。奥には一三戸（姓は落合だけ）が住んでおり、高星には庶蔵・甚兵衛・清助・休四郎の四戸（姓はない）が住んでいたことが記されている。大山神社があった高星の土地は、地主の高星正清氏が昭和五十年頃に耕地整理を行い、現在は平坦な畑になっている。耕地整理中、多くの貝塚や土器片が出土し、当時の本市担当者が採集したという。高星大山神社が鎮座していた場所は、畑の南東側の林の中に、大小の自然石が立てられ、周囲をマサゴで敷き詰め、お参りがなされている。

葉山の大きな大樹の森を聖地としてタネ国が創置され、従三位国玉大明神奥神社が創建されたことは風化されているが、タネ国が創置された頃、高星から合祀された大山祇大神と木花咲耶姫は、現在も祭神として拝殿に神明が飾られている。

拝殿の裏に一段高くしてサングを敷き詰めた台座の奥に、久基が観音様を勧請した石祠と岬から合祀した喜志賀美権現が祀られている。その両神の背後を囲んでいる大岩は、大山祇神社が鎮座していた高星から運ばれてきたもので、大きな木をテコにして道路に敷き多くの人で運んできたと言われている。拝殿

入口の石塔は海から運んできたといわれている。奥神社は旧拝殿が老朽化し昭和三十年三月改修され現在の神跡を保っている。

『国上郷土誌』に「奥神社をタネ国一の宮大山祇神社と称し…」とあるが、一之宮とは平安時代に逐次整った一種の社格である。朝廷や国司が指定したものでなく（指定した場合もあったが）、神社信仰が篤い神社が勢力を有し、おのずから階級序列のあるものが一之宮と称された。また、国府に近い所から「一宮」「二宮」と制定される例もあった。普通は国単位を一之宮と称されたが、郡単位、郷単位の一の宮もあり、複数あった（井上寛治『二の宮の研究』）。

#### 奥神社境内の楠

奥神社の境内前に楠が数本立っており、栖林久基公が植えたといえられている。久基公は生蠟を奨励し榿を植え、ガジュツ、茯苓、それにクスを植えて樟脳を作るなど殖産等に尽力したと記されている。久基の「からも伝来」は元禄十一年（一六九八）のことで、栖林と号されたのは享保二十一年・元文元年（一七三六）であることから、奥神社に楠を植えたのは、元禄十三年（一七〇〇）前後と考えられ、樹齢は約三〇〇年になると考えられる。

#### 奥神社境内のアコウの木

奥神社の鳥居をくぐり、拜殿に向かって進むと、目の前に大きなアコウの木がそびえている。故笹河鉄郎宮司によれば、昭和十四、五年頃生えたもので、樹齢約八〇年と推定されるとの

ことだった。アコウの木は、絞め殺し木という異名が付けられている。岬に塩除けの神として祀られた喜賀美権現を奥の御山にタブの木を宿木として合祀させているが、その宿り木のタブの太木を巻きこみ、颯爽とそびえている。

気根と樹幹が偉容に美しく、日本一の美根のアコウ木と呼んだ人がいたといわれている。

#### 奥神社祭神 木花咲耶姫（産土の神）

大山祇神社の祭神は大山祇尊と娘の木花咲耶姫である。父の大山祇神尊は娘の木花咲耶姫に、富士山を与え、現在も木花咲耶姫は富士山本宮浅間大社の主祭神で、富士山を守る山の神である。木花咲耶姫は訳あって、産屋に火をつけ、火あぶりの中で三人の皇子を産み育てた産土の神としても祀られている。その木花咲耶姫は、古くから奥神社の産土の神として祀られている。奥神社は、平成の初め頃までは、本市の各方面から産前産後の祈願をする夫婦がよく訪れていた。産前にお参りする夫婦は、安産祈願と書いた布を神社の鰐口に括って垂らし、お祈りをした。無事にお産を終えたら、子どもの名前を書いたのほりを神社拜殿入口に供える。子供の成長を願う家族連れで「初参り」に訪れるなど、産土の神として広く崇拜された神社である。

#### 奥神社から分社した島内の神社

奥神社は、種子島家の鹿倉になつていて、歴代島主は島内狩猟の本座として崇敬してきた。奥の御山を中心に七つの鹿倉を有し、初午の日には島主をはじめ、山奉行や行司など家来たちが赤



中目神社

尾木から来訪して、山祭りの後初狩を行った。各村の行司たちは、朝の暗いうちから浦田の田尻海岸まで行き、海に入り体を清め、竹筒に潮井を取り、御山にお参りして狩猟の祈願をした。『御家年中行事』によると「安納山、国上山の神主と「安納山、国上山の神主行司祭礼式あり、左の外官城山、納官山御鹿倉其の外山々、山の祭りは其の村々にて式有之然といえども鹿倉山祭りの根本は国上山なりとぞ」とある。鹿狩りは各村でも行われたので、種子島の大山神社の本社である奥神社の分神を勧請した。その分社は、寺之門神社・中目神社・伊関神社・軍場神社・枅之峯神社・大広野神社・西俣神社・横野神社（本立）・牧川神社・坂本神社がある。ちなみに横山神社も大山神社であるが、廃仏毀釈で廃寺になった満徳寺の跡に建てられた神社で、枅之峯集落の氏神を合祀していたともいう。

**奥神社の管理運営**

校区では、湊・浦田・中目・寺之門・奥集落から一人ずつ神社係がでて、神社の総代をはじめ各役員を決めて、奥神社、浦田神社の管理運営を行ってきた。

戦後に社格制度も廃止され、神社本庁法人奥神社として昭和二十八年三月三十一日に認証とある。同三十年三月社殿を改築、神跡を継承した。社守は、宮司が委嘱した春山家・牧山家が務めていたが、同三十一年から奥集落の氏子が一年交代で務めている。

神社運営を奥集落に移行したのは、社格制度が廃止され、神社庁法人奥神社になった頃の昭和二十九〜三十年頃と考えられる。社殿の改築は校区も関わって行われているようである。

### 元山神社

『種子島の社寺・民間信仰』によると、ご神体は椎の大樹。奥山という山神を祀る。往古は鹿倉の一つ、後世は現奥神社に合祀した。祭典日は奥神社と同じ。元山神社は、奥に住んでいる落合・倉元・白河・中崎・春山・元山・山崎・岡本の各家が奉祀する氏神社である。奥神社に合祀するまでは、神社の世話役は各家順番で行い、春秋の祭りは、奥神社の祭りに合わせて行われていた。



元山神社

## 寺之門神社

## 神社の由来（祭神・大山祇神）

国上は、かつて島主の鹿倉となっていて、毎年島主による鹿狩りが行われていた。狩りが始まる日には各村の行司役（浦田・中目・寺之門・奥・湊）は、朝の暗いうちに田尻海岸に行き、海に入り体を清め、奥神社に参拝した。しかし、その度たびに、各村の行司役が奥まで行くのは大変なことであったため、各村に遙拝所を設け、奥の神社を祈願するようになった。

寺之門は字園田の松の太木を依り木として、遙拝所を設けて奥神社を祈願するようになった。それが寺之門神社の始まりである。その後、明治三十四年の政府令に基づく各神社の廃合の際、中目、寺之門の遙拝所は、明治三十四年十二月十七日奥神



寺之門神社

社に合祀され、その後奥神社から分社して独立した寺之門神社、中目神社として編入された。寺之門神社の御神体の松の太木は昭和四十年頃枯死したため、その場所を一段高くして台座をつくり、マサゴを敷き詰め祠を造営し、鏡を供えご神体としている。拜殿は昭和六、七年頃創建された（中

村繁棟梁）。神社のまわりには二一の岩石が立てられている。拜殿のない時代、神は高いところ（岩石や榊）に降臨してから祭場に降臨し、終わると帰っていくと信じられていたので、多くの岩石を立てシメを張って聖別した名残である。

## 祭 事

神主は毎月一日と十五日は、早朝未明上古田海岸から潮井を汲んできて、清めてから拜殿等の掃除をする。神主は一年交代で任に当たり、毎年一月二日に交代する。寺之門には以下の祭りがある。

春祭り（三月十八日）

夏祭り（六月灯）

願成就（十月二十八日）

霜月祭り（十二月三日）

町祈祷（二月十八日）の祭りがある春祭り、豊作や無病息災等を祈願する。昔は境内に射場と的場を作り、竹で編んだ的に紙を貼って春的を作り、矢を放って奉納した。「豊作であつたら、願成就には踊りや相撲を奉納します」と祈願した。六月灯は子ども会手作りの提灯を参道から境内まで下げ、境内では納涼の催し等で盛り上がった時代もあった。願成就は「がんじょうじ」とアテ読みし、「願ほどき」とも言った。昔は、小学生と大人までの相撲大会や寺之門に伝わる大踊りを男たちが太鼓を下げて踊り、次に花踊りを女たちが踊り、最後に弁慶踊りを奉納したという。令和二年（二〇二〇）現在は相撲と花踊りを奉納し

て、午後からグラウンドで願成就奉納運動会を開催している。  
誤った言い伝え

寺之門神社は産土の神であるという話もあるが、分社の奥神社に、山の神（大山祇神）と娘の木花咲夜姫「産土の神」を祀っていることによる誤解である。寺之門神社は大山祇尊（山の神）が祭神である。

また、河内家の下の川を寺之川と言って、昔は寺之川の水を神社に使っていたという。現在でも寺の川の水を使っていると記した記事があるが、実際は神社用の井戸水を使っている。

### 太田の五輪塔

太田長野家のかつての共同墓地に五輪塔があり、皆がお参りをしてきた。太田には鎌倉時代に身分の高い武士がいたと伝わっており、その人の墓、若しくは法華宗の供養塔ではないかといわれている。平成中頃に、各々納骨堂を作ったため、現在五輪塔は法華宗本家の長野家の墓地に建ててあり、中世のものと思われる。

### 日高紀伊守宗俊の墓石

昔、寺之門に偉い武士がいた。その人物の墓は寺之門の日高家の墓地に建てられていると伝わっており、調査の結果、廟と呼ばれる日高家の墓地に、山川石の墓石があることが明らかになった。正面に「日隆大上人日高紀伊守宗俊」「南無妙法蓮華

経日蓮」、裏面に天正二年甲戌七月日と刻まれている。

鮫島穰著『種子島物語』に以下の内容が記してある。島津藩内統一において、日向の伊東氏をバックにした禰寝氏は厄介な存在であった。一五四〇～一五五〇年代には、まだ島津一族内で内紛が起きていた。その頃の種子島は鉄砲伝来、そして「一五四四年禰寝戦争を一応決着させ、落ち着いた時期」にあったが、時堯は島津の藩内統一の戦いに本格的に参戦するとあり、参戦する武士の中に「日高紀伊守宗俊」の名前を確認することができる。種子島時堯が島津統一の戦いに参戦した記録は以下のとおりである。

弘治元年（一五五四）、西村越前守時安・肥後大善時資・

日高紀伊守宗俊等諸突を師いて、大守貴久公に属し、帖佐、



太田の五輪塔



日高紀伊守宗俊の墓石

高樋口に戦いて各々軍功あり。

弘治三年（一五五五）蒲生、北村、菱刈、祁答院、東郷の衆、峯起す。時に大守公の軍に属して、西村越前守時安、日高紀伊守宗俊、荃永孫左衛門、安納隠岐守等力戦す。時に時安、宗俊、蒲生大手口に於いて軍功衆に冠たり

日高紀伊守宗俊は時堯の家臣で、腹心の武士であったと思われる。

#### 廟

寺之門の藤原姓日高紀伊守宗俊の墓石のある墓地あたりを廟と呼んでいた。狩りの帰りに殿様がお茶を飲むための場所であったという。

日高紀伊守宗俊の墓地の近くに台地があり、石壇を上がると屋敷があり、屋敷前付近にソテツが植えられ、石に腰かけて殿様が月見に訪れる場所であったと伝わっている。

#### 久保田神社（祭神 熊野権現）

明治十九年に川辺郡坊津の上中坊にある熊野権現神社の御分霊を勧請し、久保田神社として奉祀した。先に川辺郡坊津から移住し、新しく久保田地域を作るに当たって、郷里の神様を祀り、村民安泰、五穀豊穡を祈願したものである。当時は権現様と呼ばれていたという。

#### 久保田エビス神（祭神 エビス神）

港近くの小高い岩に、エビス神を祀っている。昔は人家のないところで、沿岸一帯は荒い磯場が続いて、魚、トコブシ、エビなどの宝庫となっていた。当時は浦田浦の区域とされて、浦人でない人たちは自由に漁をすることができなかった。

#### 明治十九年に久保田集落

ができて、同二十年代には船溜まりを造り漁労が始められている。同三十四年になると「漁業法」が發布され、漁業組合を組織し、漁業権を取得しないと漁業が困難になった。さらに免許の取得は先願主義で、同三十五、六年にかけて多くの漁業組合が設立された。国上村は、同三十五年に大久保浦と浦田浦を併せて浦田漁業組合を設立し、久保田浦は隣接する湊浦と合併して湊漁業組合を設立した。

#### 本法寺（本源寺末寺）

日典の死後、尼崎の本興寺から日良上人が来島した。日良上人の布教により島主時氏が帰依し、これまでの律宗を法華宗に



久保田神社



桜園久留真嶽神社



桜園神社



白石久留真嶽神社

改め、三島の法華改宗が寛正五年（一四六五）に始まる。国上には本法寺が建てられた。

『懐中島記』に「本源寺末寺本法寺、寺領二石、社壇（高棟板葺九尺一間）、堂客殿（茅葺）草創不詳」と記されている。

本法寺の所在地は、国上招魂社近くの遠園で、明治二年の廃仏毀釈まで在寺していた。

表8-18 郷土芸能及び民俗行事一覧

地区名	郷土芸能	現状
寺之門	花踊（市指定文化財）	伝承しているが休止中
	大踊	消滅
	弁けい踊	消滅
中目	サンゴ踊	消滅
浦田	伊勢音頭	伝承可能
	いたこ出島	伝承可能
	のほり口説き	伝承可能
	金山（かなやま）	伝承可能
湊	志賀団七口説	伝承可能
	上杉源次郎口説	伝承可能
	網引き狂言	伝承可能
	チクテン踊	消滅
	鎌踊	消滅
	六調子踊り	消滅
	千本桜（狂言）	消滅
久保田	棒踊	消滅
桜園	のほり口説き（沖永良部）	消滅
	鳩間節	消滅
地区名	民俗行事	現状
浦田	コノミヤジョウ	伝承（子ども会）
湊	コノミヤジョウ	伝承（子ども会）
野木平	トシドン（来訪神）	伝承（野木平PTA）

郷土芸能  
国上校区の郷土芸能と民俗行事は、表8-18のとおりである。

第一節 郷土芸能

## 寺之門の花踊

由来(寺之門花踊保存会)

花踊は口碑で、鎌倉初期に平家の落人が浦田の小浜に上陸し、寺之門に定住した人たちが都の思い出をこの踊りに託してきたと伝えられている。昭和初期まで踊られていたが戦時中に中断したままになっていた。昭和四十一年(一九六六)に集落長の河内市彦氏を中心に復活に取り組み、榎本トメ氏(踊りの師匠)・中村正人氏(歌い手)・石田実男氏(太鼓)・茅野金彦氏(鉦)・婦人会(踊り手)・青年団が練習を重ね、三三三ぶりに復活することができた。同年十月に国上小学校体育館の落成祝賀会で披露、翌十一月には寺之門青年団が本市の会場で踊るな



寺之門の花踊

ど、寺之門の芸能として蘇った。

その後、花踊保存会を結成し、昭和五十五年七月一日に市文化財の指定を受ける。集落の敬老会、願成就で奉納、さらに市の行事や祭り、市郷土芸能大会等で踊られてきた。また、NHKやMBCのスタジオで踊りを披露したこともあった。

しかし、長年にわたり花踊の伝承に努め、地域社会の振興に尽くしてきたが、高齢化が進み踊る人が少なくなることから、令和二年(二〇二〇)の披露を最後に休止することとなった。

## 花踊の特色、要素

下野敏見氏によると、島の踊りの中でも極めて穏やかで優雅な踊りで、島内でも寺之門だけに伝わる独特のもので県下でも類がない。また、女性だけの踊りであることが特色である。この踊りの底にあるのは、早苗植えの所作で、さらに疫病退散を祈り、花沈めや、花踊りの要素も加わり、単純化された中に気品が流れる。出端・本踊り本唄・引き端の三部構成からなる。寺之門の女性たちが稲の花が咲き、秋の豊作を願い、更に無病息災と部落の安泰を込めた踊りで、優雅で気品が流れている。

踊り継がれるうちに、変化した部分もあるが、復活当時の由来と歌詞を記載することとした(復活当時下野氏が採譜)。

一、出端(口説き風で七七七七の繰り返しで歌われる。お

つや口説きの一節)

始むるなー スゲのお笠にお顔を隠し 三十三間の清水寺に七日こもりて 兵武のけいこ

一で手裏剣 二で薙刀 三で小太刀をスラリと抜いた エー 三十三番清水寺

○出端の歌に合わせ一人ずつ踊りながら供えてある花の前まで進む(令和二年現在、この所作はなくなっている)。花の前に踊子が揃うと本踊りの花踊りに移る。

二、本唄、本踊り（七七七五となっている）かがい風

酒田ヨソナー千代嬢は酒田 櫛もヨソナーナイカヨ  
櫛も 櫛もヨソナーござるよー櫛も 髪もヨソナー出  
来たよ一髪も 寝屋のヨソナー行燈 寝屋 様のヨソ  
ナー恋風様の 千代嬢はなぜ髪結わぬ ナイカヨ  
油もないか 油もひらも手もござる できた 島田の  
髪が 行燈 誰がきて消やす 恋風そつと来て消やす  
三、引端 伊勢音頭の流れをくむ歌詞（七七七七で歌われ  
る）

京屋大臣井筒屋娘ハラヤーサーヤレヤレヤレ 七  
つ時からお伊勢に心 ハラヤーサーヤレヤレヤレ  
親に隠れてチヨイト抜け参る ハラヤーサー  
親に隠るな 暇くりよ参れ ハラヤーサーサササ  
ヤレヤレヤレ

ここは何処かと公家衆に問えば ハラヤーサーサササ  
ヤレヤレヤレ  
踊りゃよいもの 又踊りましょうハラヤーサーサササ  
これで切りましょうやめましようエー ヤレヤレヤ  
レ

○一人ずつ踊りながら舞台から退いていく（令和二年  
現在、その所作はなくなっている）。

○京屋大臣「井筒屋」娘が「五つや娘」になっている。  
○親に隠れてチヨイト抜け参るハラヤーサーで終わる。

○ハラヤーサーサササが現在はハラヤーサササと  
なり「サー」が抜けている。

花踊りの復活当時（昭和四十一年）や市文化財指定当時（昭  
和五十五年）の由来には、「花踊は極めて穏やかで優雅な踊り  
で女性達が踊るのが特色である」と記してある。復活して一八  
年経過した頃から、「花踊は元来大踊と言われ、太鼓をさげた  
五〇人の男達で踊られ、踊り継がれるうちに、集落特有のもの  
になった」と由来が変わっている。寺之門の願成就で大踊を踊っ  
た古老の話では、願成就の最初に男たちが大踊（かけうち太鼓）  
を踊り、次に女性たちが花踊を、最後に弁慶踊が踊られたとい  
うことで、大踊の次に花踊が踊られたので勘違いされたと考え  
られる。市の郷土芸能資料に、寺之門には大踊、花踊、弁慶踊  
が伝承されていたことが記されている。

### 久保田の棒踊

明治十九年（一八八六）に川辺郡坊津町の泊から、久保田上  
崎に一九戸が移住した。この中の一人である茅野乙吉氏の実兄  
で、川辺郡知覧町で棒踊や鎌踊の師匠をしていたといわれる若  
松栄吉氏が、老後実弟宅に寄留していたとき、久保田の二〇代  
の若者に教えたものである。中崎末男氏、下村実夫氏などによつ  
て昭和から平成へと受け継がれた伝統芸能である。棒踊は、島  
内各地に伝承されているが、気品が高く勇壮で、特に見栄えす  
るのが久保田、品の良いのが安納と言われている。過疎や高齢



野木平のトシドン

ことで説教してくれる。

化により平成十五年（二〇〇三）頃に踊られなくなつた。

野木平のトシドン

野木平に伝承されている民俗行事。大晦日の晩、片手に大きな刃物を持ち、鬼のような面をつけた大変怖い神が天から首切り馬に乗ってやってきて、親に代わって子どもに躰しつけや教育の

第二節 年表

和暦（西暦）		国上校区のできごと
文和元年 （二三五）		初めて塩がまが建つ（西之村の立石、国上湊あるいは大崎・尼泊・久志瀬戸・竹之川）
寛正4年 （四六三）		浦田神社創建される。境内一七七〇坪五
天文8年 （五三九）		唐船湊に漂着し全員死亡。責任を問われて家老平山備中が切腹
承応3年 （二六五四）		国上村の小浜に帰唐船難波、多数の死者を出す。唐船の貨物を引き揚げようとして長崎の水練者が来る
元文3年 （二七三八）		浦田神社落成
寛成10年 （二七九七）		官米を屋久島に運ぶ船国上大原野にて難波する
文化4年 （二八〇七）		日州の伊東鶴三郎の運漕船現和村庄司浦に漂着、小舟で牽引して浦田港に入れ修繕する
嘉永3年 （二八五〇）		大風により、現和村五四戸、国上村五八戸の家屋が倒壊。種子島全島で七三二戸
明治		
7年（一八七四）		住吉・安城・国上・坂井・西野・下中・平山・島間・安納に七十三郷校の支校を置く
12年（一八七九）		国上小学校が開校
14年（一八八一）		国上村より伊関が分離し、伊関村となる
19年（一八八七）		甕島からの移住者が野木平に入植

和暦(西暦)	国上校区のできごと
26年(二八九三)	国上方面に赤痢流行。患者相当数を出して、翌年終息に向かう
大正	
3年(一九一四)	桜島からの移住三三六戸二一九三人のうち、国上桜園に八六戸・五二九人が移住
9年(一九二〇)	国上・古田に腸チブス発生。患者九人
昭和	
14年(一九三九)	十月、国上小学校で火災発生。講堂、一便所を残して全焼
15年(一九四〇)	部落有林野統一事業を終える。統一面積三三八四町一反一畝二五部のうち、国上の分二二五町四反
24年(一九四九)	終戦からの移住民は、国上川安に九戸、上古田今成二五戸。二十八年十一月にも川安に三戸入植する
31年(一九五六)	四月、学制改革六・三三制により安納小学校と改称
37年(一九六二)	国上大平見、大中峯山で火事が発生
45年(一九七〇)	喜志鹿崎灯台点灯光度八五万燭光、光達距離二〇海里(二三里) 工費一三〇〇万円 「桜園集団電話」三〇〇戸開通
47年(一九七二)	浦田にトコブシ種苗三万個を放流
49年(一九七四)	市立国上保育園設置
50年(一九七五)	国上浦田地区、六〇畝の松林でヘリコプターを使い薬剤の空中散布を行う 市内の、浦田湊・住吉・東海・西之表の四漁協が合併し、「西之表市漁業協同組合」となり組合理事長に井元正流氏が選任される

和暦(西暦)	国上校区のできごと
50年(一九七五)	国上湊に東邦水産から寄贈されたクルマエビ一〇万匹を放流
53年(一九七八)	森林総合利用促進事業で浦田キャンプ場が完成
54年(一九七九)	国上小学校創立一〇〇周年記念式典
55年(一九八〇)	国上簡易水道が完成し九二戸に送水が始まる(二億八七五六万円)
57年(一九八二)	国上湊地区の沖合にとこぶしの稚貝一万个放流 市農協が近代的養豚施設を建設(桜園に養豚肥育センター)
58年(一九八三)	国上寺之門の花踊が市無形文化財指定
61年(一九八六)	野木平に信楽寺建立行
62年(一九八七)	国上寺之門の手づくり加工施設落成(四三〇万円)
63年(一九八八)	国上中目公民館で約八〇人が出席して移動市役所を実施
平成	
3年(一九九二)	国上地区集会室落成式行
4年(一九九三)	野木平部落移住一〇〇周年記念祭
5年(一九九三)	久保田部落移住一〇〇周年記念祭。棒踊が披露された 新林業構造改善事業(浦田線連絡道開設工事着工、翌六十三年三月完成) 市消防国上分団に新しい消防車庫が完成
6年(一九九三)	六月、国上保育園に「父母の会」によるプールが完成
7年(一九九三)	六月、国上小学校にプールが完成
8年(一九九三)	第二二回市内一周駅伝競走大会で国上初優勝

和暦(西暦)	国上校区のできごと
6年(一九九四)	二月、市内で初めて浦田町内会婦人防火クラブ結成 五月、国上中学校で火災発生。技術室棟、農具倉庫棟が全焼する 新しい桜園神社が落成
8年(一九九六)	五月、国上中学校創立五〇周年記念碑建立 桜園久留真嶽神社に沖永良部島縁故者移住一〇〇周年記念碑を建立
9年(一九九七)	白石公民館に沖永良部移住一〇〇周年記念碑を建立 二月、国上小卒業記念種子島縦断駅伝 三月、湊にふれあいの森ひろばが完成 五月二十五日、国上中央公民館落成 六月、国上小学校でトカラヤギ飼育
10年(一九九八)	三月、浦田でシーサイドハウスの落成式
13年(二〇〇一)	浦田海水浴場が環境省の「日本の水浴場八八選」に選定
15年(二〇〇三)	浦田海水浴場で校区主催の地引網大会
21年(二〇〇九)	三月、国上中学校閉校
22年(二〇一〇)	九月、新しい桜園公民館が落成
24年(二〇一一)	寛家静岡移住一〇〇周年記念碑建立
28年(二〇一六)	国上みさき保育園開園 久保田移住一三〇周年記念祭
令和	四月一日、上古田が野木平と統合合併
4年(二〇二二)	

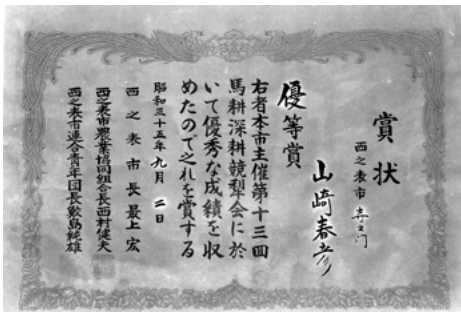
暮らしの風景写真



湊神社(昭和30年頃)



国上小学校卒業生(ろ組)(昭和24年)



馬耕試験の賞



新築した国上小学校講堂(昭和28年)